

明日をひらく地域活性化のための情報誌

地域づくり

2011

4

ISSN 1340-8917



特集 ■ マラソンによる地域活性化

本誌は、宝くじの社会貢献広報事業として助成を受け作成されたものです

□ゴ

1 巻頭エッセー／人と環境と都市が調和のとれたまちづくり

高島宗一郎（福岡市長）

特集

マラソンによる地域活性化

6 市民マラソンは地域を活性化するのか？

杉本厚夫（関西大学人間健康学部 教授）

10 北海道羽幌町 宣言タイム制、町のPR の場

松森克彦

12 千葉県館山市 「館山若潮マラソン大会」による地域活性化

川名茂樹

14 新潟県佐渡市 スポーツアイランド佐渡市の取り組み

川内 博

16 長野市 感動を後世に

大西健文

18 岐阜県揖斐川町 みんなでつくりあげる「いびがわマラソン」

高橋良尚

20 大阪市 目に、おなかに、心にもごちそう

藪井寿一

22 山形県鶴岡市 聖地の表参道活用、地域振興へ

草島 豊

25 島根県益田市 日本唯一、滑走路を走って地域を元気に！

寺戸一朗

28 四国、九州等 自然活かしウルトラやフルマラソン

編集部

30 市民マラソン ブームから定着へ

丸山智由（株式会社価値総合研究所 パブリックコンサルティング事業部 副主任研究員）

33 震災影響、マラソン大会中止相次ぐ

編集部

レギュラーレポート

34 自治体アンテナショップ

自治体アンテナショップ過去最高の出店数

編集部

団体探訪

36 NPO 法人 かなぎ元気倶楽部

かなぎ丸ごといい感じ

青森県五所川原市

38 NPO 法人フォレストサポートクラブ

里山の保全活動を通じた多彩な活動

広島県三原市

40 地域トピックス

財団法人地域活性化センター

41 平成 22 年度地域再生実践フォーラム

「地域資源を見直し需要創造」財団法人地域活性化センター

42 お知らせ

財団法人地域活性化センター

首長の思い

43 「世界の地方都市・三豊」として

横山忠始（三豊市長）

48 センター通信

グラビア

2 東日本大震災関連

4 マラソンによる地域活性化

44 第 15 回ふるさとイベント大賞

47 手前みそですが… 【兵庫県宝塚市】



外国メディアが被災者を取材埼玉県が福島県双葉町からの被災者らを受け入れた「さいたまスーパーアリーナ」内。（さいたま市）

●文Ⅱ古閑 ●写真Ⅱ時事

表紙の写真は、宮城県女川町で、自衛隊のヘリコプターにより運ばれた支援物資をリレーで下ろす被災者たち（三月十四日撮影）。

全国各地では、被害発生直後から、被災地に向け救援物資を送ったり、自治体職員を派遣したりする動きが始まり、支援の輪が広がっている。（グラビアページに関連写真と記事掲載）。

さらに、今回の大震災により福島原発の事故が起き、震災翌日には、長野県北部を震源とする地震もあった。

東日本大震災は、マグニチュード9.0の巨大地震と津波で東北から関東にかけての太平洋沿岸地域を中心に甚大な被害をもたらした。大震災による被災者数は二万七六五三人（四月四日現在）に達している。

表紙
東日本大震災

人と環境と都市が調和のとれたまちづくり

～「アジアのリーダー都市・福岡」の実現をめざして～

福岡市長 ● 高島宗一郎 そういちろう



三月に発生した東北地方太平洋沖地震にてお亡くなりになられた多くの方々の御冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に謹んでお見舞いを申し上げます。一日も早い復興を、心より願うものでございます。

福岡市は、アジアとの二千年に渡る交流の歴史を背景に発展を続けており、市民のおもてなしの心や、豊かな自然、充実した都市機能によって、世界で最も住みやすい都市の一つとして、海外の情報誌などでも高い評価をいただいております。

昨年のトピックとしては、博多港における外国航路船舶乗降人員数が、約八十七万三千人と平成五年以降連続して全国一位となる見込みとなったこと、中国発着をはじめとした外航クルーズ客船の寄港回数が過去最高の六十三回を数えたこと、さらには、国際コンベンションの開催件数も平成二十一年は東京に次ぎ全国第二位に躍進したことが明らかになったこと、などが挙げられます。

この春には、九州新幹線が全線開通し、鹿児島・博多・大阪間が最短で三時間四十五分で結ばれ、九州一のターミナルであるJR博多駅の新駅ビル「JR博多シティ」も開業し、人の流れが大きく変わりつつあります。

このような状況の中で、福岡市が、今後さらに発展していくためには、福岡市の持つ財産をさらに磨き、活用していくことが重要です。福岡市には、アジアとの交流の歴史や文化、芸術、恵まれた自然環境、地域の賑わいなど、様々な魅力的な財産があります。博多祇園山笠、博多どんたく港まつりなどのお祭りは活気に溢れ、博多ラーメン、もつ鍋、水炊きなどの食文化も多彩です。

私は、これらの財産に磨きをかけ、経済的な成長と安全・安心で質の高い暮らしのバランスをとれた「人と環境と都市が調和のとれたまちづくり」を進め、国内外から人材が集い、交流し、創造し、訪れる人も、住む人も、誰もが夢を抱き街中に元気が溢れている、「アジアのリー

ダー都市づくり」に挑戦するため、三つのポイントでまちづくりを進めたいと考えております。

第一に、「『人』を大切にし、全ての人が夢を持ち、活躍できるユニバーサルなまちづくり」です。福岡市の活力の源は「人」であり、人や文化などの様々な交流を進め、子どもや若者、高齢者や障がいのある人など全ての人の力が発揮できるよう、誰もが全ての人の思いやりを持ち、住む人にも、訪れる人にも優しいまち、「ユニバーサルシティ福岡」の実現をめざしてまいります。

第二に、「『環境』を大切にし、質の高い暮らしができるまちづくり」です。「人」の活力を支え、「都市」の魅力を支えるのは、安全な都市の中で、歴史や文化、恵まれた自然環境が実感できるという豊かさです。水と緑の環境を守り、低炭素型のまちづくりを進めるなど、福岡での暮らしの質をさらに高めるとともに、市民が安全・安心に暮らせる都市環境をめざしてまいります。

第三に、「『都市』の魅力に磨きをかけ、活力に溢れるまちづくり」です。福岡の歴史や伝統・文化、地理的特性や人材の集積などを活かし、都市の魅力に磨きをかけ、将来の成長に向けた交通アクセスや観光コンベンション機能の強化、都心部をはじめとする活力創造拠点づくりをめざしていきます。例えば、観光の面では、訪れる人がわかりやすく、気軽に利用して都心を回遊できるよう、観光の主要ポイントと交通拠点を結ぶ「2階建ての観光回遊バス」が走るようにしてまいります。

これからも福岡市では、地理的にも近く交流が活発な韓国の釜山広域市と、アジアの成長力を活かした「超広域経済圏」の形成に向けた挑戦を続け、革新的で魅力溢れる地域の形成をめざすなど、九州やアジアなどの各都市との連携をこれまで以上に強め、市民の皆様や様々な方々の共感をいただきながら、「アジアのリーダー都市・福岡」の実現をめざしてまいります。



東日本大震災により、福島県から新潟県三条市に避難した被災者を激励する泉田新潟県知事。新潟県三条市で（新潟県提供）



市民ボランティア、消防団員等によるいわき市、盛岡市への支援物資の積み込み作業風景（北海道旭川市提供）

大震災 る支援の輪

また、首都圏以外からも、岩手、宮城、福島の被災地に向け救援物資が送られた。

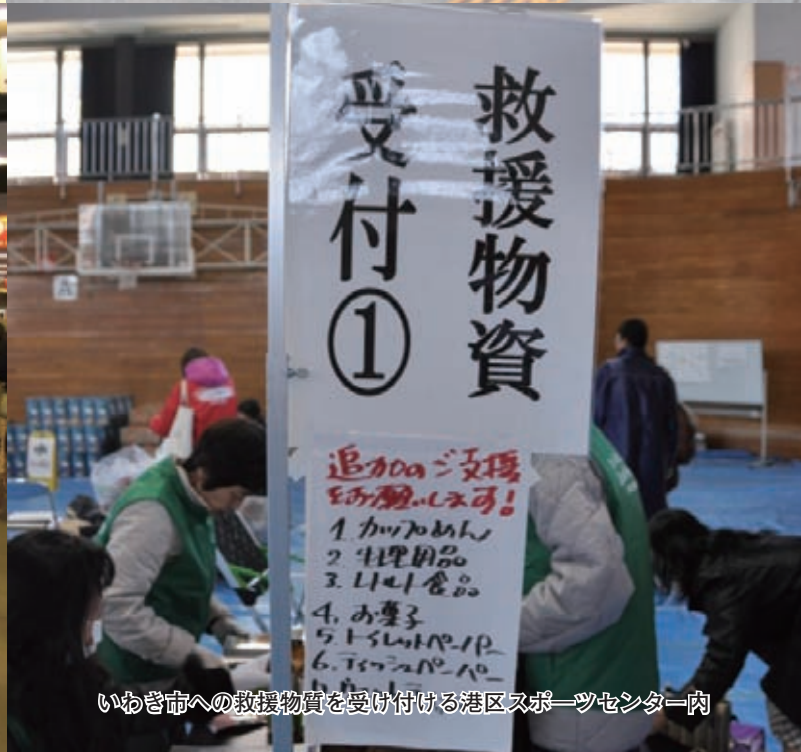
今回、「応援隊派遣」「被災者の受け入れ」「ボランティア」「救援物資」「募金・義援金」をキーワードに、震災発生後の首都圏と各地における支援の動きを写真で紹介した。



いわき市への第1次派遣隊の出発式（3月24日東京都内の港区役所前で）。右は武井港区長。左上写真は、車に荷物を詰め込む派遣隊



埼玉県が福島県双葉町民を一時受け入れた「さいたまスーパーアリーナ」内（3月24日）。左上は同アリーナの外観



いわき市への救援物資を受け付ける港区スポーツセンター内



東京都八王子市の街頭募金。JR八王子駅北口（3月17日、八王子市提供）



東京・東銀座の「いわて銀河プラザ」前で高校生有志の募金活動



津市での救援物資の受け付けの様子（津市提供）



熊本県は全国知事会緊急広域災害対策本部の要請を受け、自衛隊と連携し、毛布などの救援物資を輸送（熊本県提供）



福岡県久留米市からの災害支援

東日本 全国に広が

東日本大震災の発生直後から、全国各地で被災地に向けた支援の輪が広がった。例えば、東京都港区は、福島県いわき市との派遣協定に基づき、同市災害対策本部へ職員の派遣を始めた。埼玉県は、福島第1原発があり避難指示が出された福島県双葉町の町民を「さいたまスーパーアリーナ」で受け入れた。

大津波対策で英知を絞れ

―防災対策と復興プランで関係学会が連携―



早稲田大学理工学部教授
日本学術会議 土木工学・建築学委員会委員長

濱田政則

―東日本大震災は、巨大地震と大津波と原発事故による複合的な大災害となり、死者・行方不明者が二万七千人（四月十一日現在）を超えています。この未曾有の大災害を専門家のお立場からどう受け止めていますか。

専門家にも重大な見落としがあった

地震防災工学の分野を大学卒業してから四十年間やってきましたが、今回の大震災が起きて最初に申し上げねばならないのは、われわれ専門家の分野でも重大な見落としをしていた、といわなければならぬことです。

二〇〇四年にインド洋のスマトラ沖で起きた大地震で、津波の被害を受けたバンダアチェ市という町へ被災後に行き、現地視察をしました。そのまっただけで約十六万人の犠牲者がありました。

その時に感じたのは、「わが国ではマグニチュー

ド（M）九・〇などという地震はとても起こらないだろう、スマトラだから起きたのではないか」という思いでした。ところが、今回それが起きた。

考えてみると、スマトラ沖のプレート構造とわが国のもつと複雑な三陸沖のプレートの構造を考えると、全く同じ条件なんです。わが国では起こらないと思ってきたのは、歴史的に見てわずかな百年程度では、そういうことが起きなかったからで、科学的根拠は全くなかったわけです。そういう意味で、われわれの分野（専門家）が重大な見落としをしていた、といわざるを得ない。

もう一つ、一九九四年に米国のノースリッジで地震が起きた時、日本から調査団が被災地を訪れ、橋けたが倒壊した高速道路などを視察しました。その時も「日本ではそういうことは起きないだろう」と思ったのですが、翌九五年に阪神・淡路大震災が発生し、ノースリッジで見たのと全く同じことが起きたわけです。

われわれは同じような判断ミスの過ちを二回犯したことになる。専門家としては誠に申し訳ないと言わざるを得ない。

数千年のオーダーで大災害の研究必要

今回の震災の根源はどこにあるか。三陸沖の海域でどういう地震が起きるかということは、中央防災会議などを中心に調査が進んでいましたが、宮城県沖で想定していた地震の規模はM七・五でした。実際にはその数百何十倍のエネルギーを持つM九・〇の巨大地震だった。

地震学的に全く予知できなかったのかというと、われわれが目をつけていたのは南海トラフ、東海地震、東南海地震とそこばかりでした。そこで地震予知のため多額の国費を投入し、地震計を置いたりボーリングしたりしてきました。

なぜ三陸沖から茨城沖の地震に気付かなかった



構造的に無損傷で残ったRC集合住宅（5Fまで津波が達している、陸前高田）



倒壊した4階RC建物（基礎が不十分であったと考えられる、女川）

のか。いざ地震が起きてみると、「私はそういうことを言ってきた」という人もいますが、少なくとも国の公的機関として宮城沖海域については考えていなかった。ですから、将来に向けた検証はそこから始めるべきだと思います。

——今回の大地震で分かったことは？

われわれ学会でもいま議論を始めていますが、こういう大災害は数百年程度のオーダーで考えてはいけないのではないか、ということです。津波に関する記録が残っている古文書などの調査・研究がなされてきたが、古文書もないもっと昔については、津波の痕跡を地質学的に調査して、世界

的にそういうものがどう起きてきたかを、数千年のオーダーで研究することが必要になっている。それが今回の大地震ではつきりしました。

それでは数千年に一回とか、今回の大震災も「千年に一回の災害」と言われていますが、そうした自然現象にわれわれはどう対処すべきなのかとなると、それは非常に難しい問題です。

日本全土を高さ十数メートルの防潮堤で囲うなどということはできない。ハード面での対策には限度がある。これは阪神・淡路大震災の後からとも言われたことですが、こうしたハード対策だけで防災対応するのは不可能である。ソフト面での対

応をもっと考えるべきだと思います。

原発事故はハードよりソフトの問題

東京電力福島第一原子力発電所の事故も、津波による給水・冷却系統の故障が直接的な原因でした。今回の地震でも原子炉や格納容器、爆発が起きる前の建屋など、ハードは持ちこたえていたのです。ただ、電機系統の給水・冷却系統、これをソフト部分ととらえれば、この部分が津波による被害で故障してしまった。

そういう給水・冷却系統を、いかに何重にも張り巡らせるかというような、ソフト対策で対応する以外にないと思います。もちろんハード対策も必要です。将来、何メートルの津波を想定すべきなのか、というような議論もこれからしなくてはいいかもしれません。

阪神・淡路大震災の時は明解でした。神戸市で発生し観測された地震動で壊滅的な被害を受けた高速道路や港湾、建物がありますが、この地震動によって構造物が損傷を受けたとしても倒壊さえしなければ大量の人命を救える、という観点から対応してきた。

神戸で起きたレベルの地震動が全国のほかの地域で起きたとしても、それに耐え得る基準で対応すれば人命だけは救える——というのが基本概念でした。それを基準に道路や地下鉄、建物などの構造物の強度を補強してきたわ

けです。

今回、復旧作業が既に始まっていますので、これからの防災対策のコンセプトを議論し、早急に打ち出さないと、単に復旧のレベルをどこに置くのか、単に被災地を元に戻すだけではなくて、構造物の強度をより増していくことを含め対策が必要ですよ。

——今回の大震災では「想定外」という言葉がよく使われましたが、阪神・淡路大震災や新潟中越地震の教訓が十分活かされなかった、ということでしょうか。



2004年スマトラ地震津波、津波に生き残ったモスク

今度の大地震では、阪神・淡路大震災の時のように、地震動そのもので橋が壊れたとか建物が倒壊したということはありませんでした。それは過去の教訓を生かして構造物を補強してきたからです。津波で壊れた建物はもちろんありますが……。

また、新潟中越地震の教訓といっても、今度の災害の規模は二ケタぐらい違う。その教訓が活かされるとは思えません。被災地域が多岐にわたり、新しいタイプの原子力発電所の災害も起きてしまった。

新潟中越地震のとき、やはり東京電力の柏崎原発で小規模だが火災が起きましたが、本来、原子力発電所で火災が起きてはいけません。それにより国民の信頼を損ねた。それでも、あの時は放射性物質の漏れなどの事故はなかった。事業者側に対する住民の信頼感がこれまでもなかったのですから、今回の事故でそれが決定的になった。

「耐津波」工学を始めるべきだ

原発事故は、私の専門外の分野ですが、そうした信頼感の喪失を払拭して、わが国のエネルギー政策の中で原発の必要性について国民的合意を図るのは大変難しいと思います。これは重大問題です。これが鎮静化するのを祈るしかありませんが、これからわが国の原発に対して国民的合意が図れるのかどうか、今の時点ではとても心配です。

——今回、壊滅的な被害を受けた被災地はどこも津波によるものでした。耐震対策というより津波対策がより重要になるのでは？

耐震の研究者はいるが、津波について研究して

いる人はわが国では少ないです。そもそも揺れに耐える「耐震」という言葉はあるが、「耐津波」という言い方は聞かない。私は耐津波工学を始めべきだと思う。今回の大津波を受けても残っている鉄筋コンクリートの建物とか橋などはありません。そういうものは津波に耐えられたわけですから。そうした構造物をよく調べて、津波に耐えられる構造物の研究をもっとしなくてはいい。

町の中を通り過ぎて行った津波、溯上してきた津波がどのくらいのスピードで押し寄せてきたのか。それにどこまで耐えられたのかなどは、コンピュータのシミュレーションで分析できる。そういうものと津波で流されたものをまず調べて、津波に耐えられる構造物を研究すべきだと思います。

被災地へ行って感じたのは、二十メートルとか三十メートルの津波が来たらしょうがないと皆さん思われるけれど、それに耐えた構造物があるということ。ですから津波に耐える構造物を造り、津波に耐える町づくりをすることを考えていかねばなりません。

津波の研究者は、津波がどの高さまで来たかということ調べておられますが、それも大事ですが、津波に対抗するにはどうしたらよいか。対抗できる構造物を研究することも大事です。その学問が必要ですね。

関係学会も連携して復興プラン提言

——政府は、被災地の復興の青写真を描くため有識者らによる「復興構想会議」を設置し、四月



構造的損傷がないRC橋（東日本大震災）

中に政府の「復興本部」がこの会議の提言を受けて、具体的な復興計画を策定し、執行していく方向が示されています。

復興会議がどういう形になるかまだよくわかりませんが、財政的な裏付けと執行の権限をどう与えるかが問題ですね。復興会議でそういう議論をしていたくのはありがたいですけど、有識者を呼んでいい知恵を集め、提言を作り上げても権限を持たせないと実効性が上がらない。

今回の大震災を受けて、学会でも日本学術会議が中心となって、関連学協会連絡会をつくり、東

日本大震災に関わる各学協会の今後の活動について、幾つかの事項について連携して行っていくことを申し合わせました。

そこには土木学会、日本建築学会、地震学会、自然災害学会や原子力学会、水環境学会、水産学会、国立公園などに関する造園学会等、二十一の学会が加わり、それぞれの系の学協会の間で連携・協働の動きが出ている。

いろいろな学会や機関がいろいろな復興への提言をそれぞれに出しても、提言の嵐、みたいになっただけでいいかねない。関連学協会連絡会では、被災地の復興に関する緊急提言として「復興への四原則」を概念としてまとめました。これを政府や関係自治体などに提出します。

海外での復興プランの失敗に学べ

先ほど言ったバンダアチェ市では、災害後数カ月の間に復興プランが策定されました。海岸線より数百メートルの幅に津波防御用の丘陵を造成する、鉛直方向非難のための避難テラスや建物を造る、また町全体を海岸線より四〜五キロメートルのバッファゾーンを確保して移転する——などのさまざまな計画が立案されました。

しかし、いずれも実行には至らなかった。被災後、被災した住民たちが所有地に戻り、何らの統制と規制がないまま、それぞれの住居の再建を始めたことが全体計画の実行を不可能にした一因になっていました。

東日本大震災でも同様な事態が予想されます。現に、被災地では仮家屋などの建設が始まっている。

ます。このままでは無秩序な復旧・復興になることが避けられない。

関連する学会では、被災地を防災性と環境性に優れた地域に再生させるため、政府と関連する自治体、企業、NGO、被災地内外の人々が連携して、被災地復興のために取り組むための復興ビジョンを近く緊急提言する予定です。

長期的な復興支援には 法律的な根拠が必要

被災地の復興プランは地域によっても違う。水産業が基幹産業であるまちや農業が中心の地域、人口規模なども違う。基本的には自治体がつっていく以外にないと思いますが、学術面からの支援は、それぞれの自治体ごとにこうした連携をベースに、例えば大学単位で手分けして自治体を担当していく、というような考え方もできる。

——被災地への支援の輪が国内外に広がっていますが、今後、国や被災地以外の自治体、企業や国民はそれぞれどのような活動・役割を担えばよいでしょうか。

被災地への支援活動も被災住民を避難先が受け入れることなどで、やっぱり分担しなければならぬ。義捐金の募金を含め、いま善意でさまざまな支援が続いています。しかし、善意の支援だけでは長く続けるのは難しいと思う。

長期間の復旧・復興支援を成し遂げるには、法律的な根拠をしっかりとらせて支援の仕組みを考え抜いていくことが必要ではないでしょうか。

（四月八日インタビュー・編集部）

マラソンによる地域活性化



オロロンライン全道マラソン大会 ● 北海道羽幌町 (p10-11)



館山若潮マラソン大会 ● 千葉県館山市 (p12-13)



佐渡国際トライアスロン大会、佐渡トキマラソン
● 新潟県佐渡市 (p14-15)



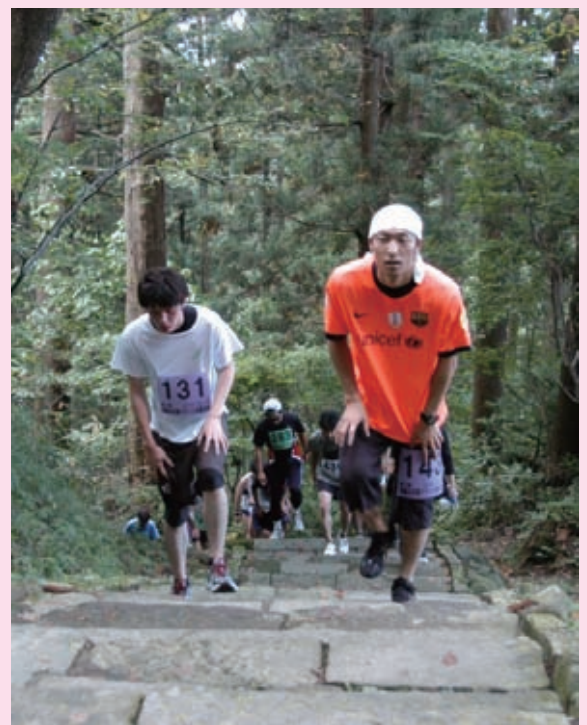
長野オリンピック記念長野マラソン大会 ● 長野市 (p16-17)



いびがわマラソン大会 ● 岐阜県揖斐川町 (p18-19)



大阪ごちそうマラソン ● 大阪市 (p20-21)



羽黒山石段マラソン全国大会
● 山形県鶴岡市羽黒地域 (p22-24)



萩・石見空港マラソン全国大会 ● 島根県益田市 (p25-27)

市民マラソンは地域を活性化するのか？

1. 今なぜ、市民マラソンなのか？

① 健康のための運動

色とりどりのランニングウェアが街を駆け抜けていく。ゴールした人の表情は、満ち足りた笑顔であふれている。そして、ハイタッチでお互いの健闘を喜び合う。今ではおなじみの市民マラソン大会の風景である。

老若男女、これほど多様な人が一緒に参加し、楽しむスポーツは他にあるだろうか。

この市民マラソン大会には、健康のために走り始め、気がつけば参加していたという人が多い。

一九七〇年代から、健康不安を社会的問題としてマスコミが取り上げるようになり、人々の健康意識は高まった。とりわけ、運動不足による疾病が増加していることが報じられ、人々は健康のために運動するようになったのである。

この健康のための運動として脚光を浴びたのが、「ジョギング」である。ジョギングの人気は、その手軽さにある。他のスポーツのように、バットやボールといった特別な道具も、体育館やグラウンドのような施設も必要ない。ランニングシューズと走れる道さえあればいいのだ。また、速く走るということなら別だが、単に走るだけなら、それほど特別な技術を身につけなくてもよい。さらに、一人で自分の好きな時間に走ることができるので、運動する自由度がすこぶる高い。

しかも、ケネス・クーパー博士によって、「エアロビクス（有酸素運動）」が健康を維持増進する運動として有効であるという科学的根拠が明らかにされたことも、ジョギングブームに火をつけた。

出勤前あるいは昼休みに皇居の周りを走るジョガーが報道されたり、アメリカの大統領も、ホワイトハウスの前をジョギングする姿をメディア

に流し、政治的キャンペーンとして、健康イメージをアピールするほど、ジョギングによる健康づくりが世界的なトレンドとなったのである。

② ジョギングからマラソンへ

しかし、日本では、ジョギングをされていて誰かが並走すると、その人には負けたくないという競争心がふつとふつとわきあがり、オーバーペースで走りだす。また、昨日走った時間よりも、今日はずっと速く走ろうと記録への挑戦となり、やがて健康のためのジョギングは、競技性を伴ったマラソンというスポーツへと変身するのである。そこでは、健康のためという意識は忘れられ、マラソンというスポーツに夢中になるあまり、身体を酷使し、足を痛めたり、疲労骨折になったりと、逆に健康を害するということも起きている。

このような状況の中で、市民ランナーは誕生したといっても過言ではない。

市民マラソン大会の老舗は一九六七（昭和四十



関西大学人間健康学部 教授
杉本厚夫



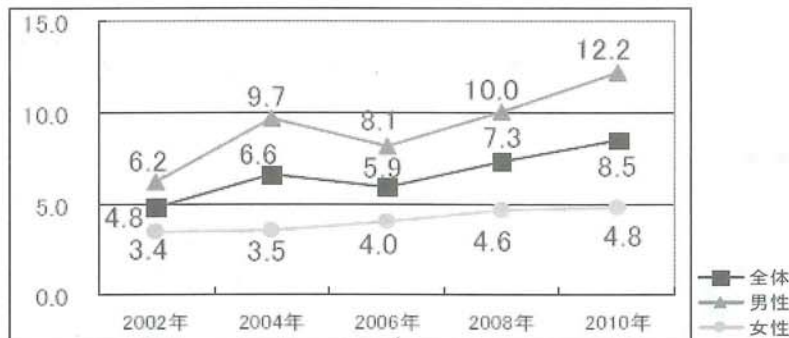
地元の声援を受けて、老若男女がレースを楽しむ

二二)年に東京の青梅街道を円谷幸吉選手と走った「青梅マラソン」である。その時の参加者は百八十人程度であったが、それが十年後には五千人を超す大きな大会となり、現在では二万人を超す人気のレースとなった。

一九八〇年代になって、市民マラソンは全国に広がり、二〇一〇(平成二十二年)年度では約千百を超す市民マラソン大会(駅伝とクロスカントリーは除く)が、一年を通して全国のどこかで行われている。

そのひとつ、二〇一一年(平成二十三年)年二月に宇治市で開催された宇治川マラソンには四千二十四人の参加申し込みがあったが、そのうち宇治市民は六百九十八人と一七・三%にしか過ぎない。北は北海道から南は熊本まで、全国からの参加者

東京マラソンを契機として増え続けるジョギング・ランニング人口



※一年間に「ジョギング・ランニング」を行った割合を示す
 笹川スポーツ財団「スポーツライフに関する調査報告」2010年より

がある。雑誌「ランナーズ」やRUNNETなどのインターネットによって大会情報を集め、参加申し込みをするのである。

では、なぜ地方都市で開催される市民マラソン大会に、これほど多くの人が参加するのだろうか？

2. 何が市民マラソンに誘ったのか？

① Seeing から Doing

近年の観光は「観ること(Seeing)」から、訪れた場所で何らかの活動を「すること(Doing)」に変わったといわれる。この活動の一つとしてマラソンがある。

一九八一年にスタートした「ロンドンマラソン」は、タワーブリッジやバッキンガム宮殿などの観光地を巡ることで人気を博した。この観

光をもっと積極的に進めたのが「ホノルルマラソン」である。このマラソンはもともと心臓疾患をもった人のためのフルマラソンとして始まった。しかし、ホノルルのダイヤモンドヘッドを背景として走るコースは、新たな観光を生み出した。一九八五年からは、航空会社がスポンサーとなり、そのツアーは爆発的な人気をよび、今では日本人が三万人近く参加する大会となった。また、このマラソンの特徴は、ゴールまでの制限時間を設けていないことだ。競争ではなく、自分のペースで友達と観光しながら参加することができるのである。

二〇〇七(平成十九)年から始まった東京マラソンには、約三十万人もの応募があり、抽選で当選した三万人が走る。これは、東京の観光地である皇居や東京タワー、銀座や浅草を走り、マラソンをしながら観光もできるので人気がある。また主催者側も観光を視野に入れて大会の受け付けを前日に済ませるようにし、マラソンの前に観光をすることによる地域への経済的効果を狙っている。

このように、マラソンというスポーツのために旅行することを、「スポーツ・ツーリズム」と呼び、集客力のある市民マラソンは、地域へ人を呼び込む目玉商品なのである。

② 日常から非日常へ

一九七〇年に「ニューヨークシティマラソン」が始まった。その当時は百二十七人のランナーがセントラルパークを四周するというものだったが、一九七七年に、街中を走るコースに変更したことによって、五千人規模の大会に成長した。

このように、普段は走ったり、歩いたりしてはいけない車道を走ることができなのが、市民マラソンが盛んなもう一つの理由である。つまり、日常を非日常に変える遊びの楽しさである。もちろん、スポーツ自体が非日常の世界を体験することにあるのは言うまでもない。

一九九〇年代に入って、このような非日常化のスポーツが流行した。

3 オン3のバスケットボールはもともとストリートバスケットボールと呼ばれ、道路に設置されたバスケットゴールを使ってゲームをしていた。都市の道路という日常を、バスケットボールによって非日常に変えたのである。スケートボードも、歩道を滑ったり、階段を下りたりと都市のルールを破るという点において非日常の世界で遊



普段は走ってはいけない車道を走る

んでいるといえる。

その意味で、体育館やグラウンドといった施設の中に幽閉された近代スポーツを、市民マラソンは解放してくれた。近代的な都市の施設から飛び出し、日常生活の空間を遊び空間に変えることによって、閉塞した身体を解放しようとする試みがある。人々の共感を呼び、多くの人々をマラソンへと誘うのである。

③ 孤立感から一体感へ

現代社会はある面、孤立化社会と言えるのではないだろうか。それは地域の中で、知らない人と出会う場が少なくなってしまったからだ。

最近の居酒屋の売りは「個室」である。完全な個室でなくても、ボックスになっていたり、すだれやカーテンで仕切られていたり、他の知らない



ゴールした後、自然と会話が生まれる

いお客さんと目を合わせることがないような構造になっている。ファミリーレストランでも、ほとんどの場合、相席はない。また、かつてカラオケは、スナックで見知らぬ人と歌っていたが、「カラオケボックス」の出現で、親しい仲間で行くところになった。さらに、通販によって、われわれはお店の人と話すこともなく買い物ができるのである。われわれの日常生活は、外に出て知らない人と会うこともなく、孤立な生活を強いられているといっても過言ではない。

しかし、市民マラソンはこのような都市の孤立感からわれわれを救ってくれる。同じゴールに向かって走るといことは、自然と一体感を生み、他者はライバルというよりレースを共に楽しむ仲間という意識の方が強い。だから、ゴールした後、レースを振り返って、自然と会話が生まれる。

このように、市民マラソンに参加する人は、走ることにもさることながら、参加した見知らぬ人や応援してくれる地元の人との新しい出会いに、普段では味わえない、また単なる旅行では味わえない人との触れ合いを感じ、都市の孤立感は払拭されるのである。

3. 市民マラソンは地域を活性化 するの？

① 参加から参画へ

地域に根差したスポーツクラブをつくろうとして始まったプロサッカーのJリーグは、地元自治体、地元企業の支援、地元住民の支持がなければ加盟できない。そのひとつ鹿島アントラーズの鹿島町（当時）は、地元住民が試合を見に来るお客



スポーツ・ボランティアによる地元の人との触れ合い

さんのために、交通整理や球技場でのボランティアをすることで地域意識が高まり、町が活性化したという。

このようなスポーツイベントにかかわるボランティアを「スポーツ・ボランティア」という。日本では、二〇〇二（平成十四）年の日韓サッカーワールドカップで、三万に近い人々がボランティアとして関わることで、その存在が注目されるようになった。

市民マラソン大会のボランティアの主たる活動内容は、「給水・給食」、「記録・審判」、「交通整理」で、とりわけランナーと直接触れ合うことができる「給水・給食」は人気が高いという。つまり、他の地域の人を受け入れ、世話をする「ホスピタリティ」によって、地域は活性化するのである。

先で述べた宇治川マラソンでは地元の参加ランナーより多い約七百五十人の人々が、ボランティアとして関わっている。もともと、この市民マラソンは地域の団体が一つになるためのイベントとして始まっているので、まさに地域の活性化が目的であった。

その意味では、市民マラソン大会に「参加」することだけではなく、そのイベントと一緒に作りだすボランティアとして「参画」することが、地域の活性化につながると言えよう。

② スポンサーからパトロンへ

地元企業から協賛金を集めることも地域の活性化につながる。それは、単に大会の運営資金を集めるということではなく、主催者側が市民マラソンを開催することが、地域にとって有意義であるという趣旨を、企業にだけ伝えられるかである。その趣旨に賛同したことの証が協賛金であって、地域のための活動に企業が協賛するということがなければ、その地域は活性化しない。つまり、お金を集めることは「目標」であっても、「目的」ではない。しかし、企業によっては、協賛したことでどれだけの宣伝効果があるのかという見返りを求める場合がある。これは協賛ではなく、スポンサーである。あくまで協賛は見返りを求めないパトロンになることなのである。

市民がパトロンになることもある。近年、ロンドンマラソンやニューヨークシティマラソンなどは、チャリティイベントとして、個人および企業などの団体からチャリティ資金を集める活動を行っている。二〇一一（平成二十三）年から始まる大阪マラソンもこのチャリティイベントとして

展開しようとしている。このようなスポーツを通してのチャリティ活動は、現代の社会的問題を認識し、それを自分たちで何とかしようとすることで、地域の「公共」意識を育てることにつながる。

③ 単独イベントから複合イベント

市民マラソンだけでなく、マラソンに興味のない人は関わろうとしない。祭りや音楽フェスティバルなどのスポーツ以外のイベントと共催することによって、多くの住民を巻き込むことができる。

また、参加形態も個人参加だけではなく、家族やグループで参加できるようにレースをつくることで、普段はあまり走ることに関心なかった人も参加することができるようになり、地域の活性化につながる。

いずれにせよ、地域の誰もが何らかの形で参加・参画できる市民マラソンをデザインすることで、現代社会で失われつつある地域の人々が繋がる機会を提供することができる。

その意味で、市民マラソンは地域を活性化する無限の可能性を秘めていると言えるだろう。

【参考文献】

- ・杉本厚夫『かくれんぼ』ができない子どもたち』ミネルヴァ書房、二〇一一（平成二十三）年
- ・杉本厚夫『映画に学ぶスポーツ社会学』世界思想社、二〇〇五（平成十七）年
- ・山口康雄編『スポーツ・ボランティアへの招待』世界思想社、二〇〇四（平成十六）年

※注・本記事では、海外大会の紹介があるため、年を西暦表記にしました。

マラソンによる地域活性化

1 北海道羽幌町

宣言タイム制、町のPRの場

―オロロンライン全道マラソン大会―



オロロンライン全道マラソン
大会事務局
松森克彦

1. 大会の開催経緯や概要・実績

羽幌町は北海道の日本海側北部に位置し、小樽から稚内に伸びる日本海沿岸の通称オロロンラインのほぼ中央に位置する。甘エビ漁獲量が日本一で、人口約八千人の小さな町である。また、日本では唯一のオロロン鳥（ウミガラス）の繁殖地であり、実際にオロロン鳥を見ることが出来る天売島と、高級食材、焼尻綿羊（焼尻サフォーク）の牧場を持つ焼尻島がある。

昭和の時代には、三炭山（羽幌・上羽幌・築別）を抱え人口も三万人に迫る時もあったが、燃料が石炭から石油に代わり、石炭の需要が落ち込むにつれ、相次いで各炭鉱が閉山。国鉄も廃止路線となり人口が流失し、地方都市の問題である過疎化、限界集落に近づいている状況である。

昭和五十年に町民憲章が制定され、文化を高め、スポーツに親しみ明るいまちづくりを目指すことになった。昭和五十四年には、羽幌町体育協会・

羽幌陸上競技連盟・羽幌町体育指導委員連絡協議会が実行委員会をつくり、宣言タイム制のマラソン大会を企画。そして、全道各地から三百人余りの参加を得て、第一回宣言タイム制オロロンライン全道マラソン大会を開催した。

現在、第三十二回大会（平成二十二年七月二十五日開催）を終えた。この間、コースおよび発着点が三度変更になったが、名物であるコースの一部、国道を走りながら海に浮かぶ両島を見て走ることが出来るコースは残した。

第三十回大会から、羽幌町よりスポーツ事業としてNPO法人羽幌町体育協会が請け負い、事業主管とし運営委員会をつくり大会の開催運営に当たっている。参加者の総数は毎年減少傾向にあるが、記念大会だった第三十回大会を除き、例年百八十人前後の参加総数で推移している。

このオロロンライン全道マラソン大会の大きな特徴は宣言タイム制であること。自分の走破タイムをエントリーの時点で登録し、当日実際に走ったタイムとの差を競い、誤差の少ない人が優勝と

なるルールで行われる。普通の大会はスピードマラソンであるのに対し、同大会は正確性マラソンといえる。大会では、日ごろのジョギングで一定のスピードで走ることを体で覚え正確なラップを刻む、これが優勝へのキーポイントである。スピードマラソンではないので、初心者から高齢者まで気軽に参加できる大会といえる。現に参加者は四十代から八十代までが多く、気軽な大会として定着していると自負している。

2. 地域を活性化させる仕組みの模索

大会スタッフもこのマラソン大会が地域振興や町のPRの場であると考えられている。大会の参加者の多くは町外者。実に参加選手の九五%が他市町村からの参加（うち数人が本州からの参加）であるため、地元選手の参加や地域住民のお手伝いの増加などを図り地元の参加協力者が増えるよう色々試行錯誤を繰り返している。

例えば、①選手受付等の場所での地場産品の販売やPRコーナー②閉会式を兼ねたレセプションでの地場産品の抽選会③バーベキューなどでの大会スタッフと参加選手の交流―などだ。さらに、第三十一回大会からは北海道内の著名人やスポーツ選手等をゲストランナーとして招き、スタッフ、参加選手ともども心の触れ合いができるようにし、大会を人づくり、郷土への思いを高める場として位置付けている。

地域活性化という大きな意味の中で、人づくりや郷土愛等をスタッフ、参加選手で共有することにより、事業の運営・成功につながり、新しい事



スタート



開会レセプション



表彰式

業の展開や参加に発展し、地域活性化にもつながっていくと思っている。

3. 参加選手の増加を目指す

この大会の課題は、参加選手の減少、大会スタッフの高齢化である。大会の内容等は、少しずつではあるが改善を目指し取り組んでいる。初めに取り組みんだのは賞状や入賞メダルのオリジナル化、次にゲストランナーの優待、地場産品の試食などだ。

大きな課題である参加選手の減少は、新規選手の参加が少ないことが原因である。多くの参加者

は毎年来ていただいているリピーターの選手で、その選手も高齢化が進んでいるのが現状である。しかし、「この大会が大好き」と言ってくれる参加選手がいて、本当に頭が下がり「有難い」の一言である。

参加選手の増加を目指した皆さんのマラソン雑誌や情報誌に記載をしていただきながらその他に、新しいPRの方法を検討し、この大会に足を運んでもらえるよう努力していきたい。

スタッフの高齢化は過疎地域であるがゆえの問題でもあるが、そのままにしておくことは出来ない。例えば、現在は参加していない地元でスポーツをしている高校生を中心にボランティアを募つ

てスタッフとしてお手伝いをしてもらう。大会が、高校生にとって地域の事業を支えて故郷を思う心を養ってくれる場となり、地域活性化の一役にもなると考えている。

この大会は、平成二十三年度から羽幌町総合体育館の指定管理業務の中に盛り込まれることとなった。NPO法人羽幌町体育協会は指定管理者の申請を行い、指定管理者として体育館の運営管理をしながら地域のスポーツの振興をサポートし、この大会がより多くの方々に参加をしていただけるようさらに努力する。大会を引き続き開催していくため、多くの方々が参加していただけることを期待している。

聖地の表参道活用、地域振興へ ―羽黒山石段マラソン全国大会―

開催経緯・概要・実績

山形県鶴岡市羽黒地域は、庄内平野の東南に位置し、出羽三山（羽黒山・月山・湯殿山）の山麓を占め、東は旧立川町、西南は鶴岡市・旧櫛引町、西は旧藤島町に連なる。稲作をはじめ当地域を代表する庄内柿や、月山高原の豊かな土壌と爽やかな空気の中で育ったブルーベリー・高原野菜など、多くの農産物が生産されている。

また、山岳修験の山としても全国的に知られる羽黒山は出羽三山信仰の拠り所で、古くから人々の信仰を集め、年間約七十万人が参拝する聖地となっている。

羽黒地域は、自然・文化・歴史等豊富な資源に恵まれた農業と観光の町。最近では、劇場公開された藤沢周平作品の最高傑作「蟬しぐれ」や「山桜」などの映画撮影がこの地域を中心に行われた。

平成十三年、商工会員有志五人（羽黒やまびこ会）が羽黒山石段を駆け登るマラソン大会による



出羽商工会
羽黒支所長
草島 豊

地域活性化を呼びかけ、「地域振興活性化事業」の一環として国、町の補助金を受けた。そして、商工会が中心となり、旧羽黒町、地元高校、体育協会、走友会等多くの関係機関・団体から支援を受けながら実行委員会を組織し、「第一回羽黒山石段マラソン全国大会」を開催。その後、回を重ね、昨年十月十七日に十回目を開催した。

大会は、マラソンの部とウォーキングの部に分かれる。マラソンのコースは全長約六キロメートル、標高差約三百十メートルで、約九割が上り。うち随神門から始まる全長一・九キロメートル、二千四百四十六段の長い石段（表参道）は、一の坂から三の坂まであり、一気に駆け上る起伏に富んだコースになっている。特に、二の坂は別名「油こぼしの坂」と言われ、マラソンコース最大の難所である。こうした過酷なコースを走り終えた達成感・充実感がランナーには魅力となり、回を重ねる度に参加者が増えている。

また、コース両側にはミシユラングリーンガイドジャポンの三ツ星に認定され、樹齢三百五十年

五百年で国の特別天然記念物に指定されている杉並木が続く。コース途中には、ひっそりと立つ国宝五重塔もあり、日本一の景観を持つマラソンコースといっても過言ではない。

一方、ウォーキングには、随神門をスタートし、羽黒山表参道の石段、全長約一・九キロメートルを地元観光ガイドの説明を受けながら、ゆっくりと歩いて山頂を目指す「石段ウォーキング」が設けられている。さらに、歴史の街宿坊街をガイドとともに散策する「歴史の街宿坊街を歩こうの部」もある。

大会の目的は二つあり、一つは、新たな地域おこ



大鳥居

表1 石段マラソン・ウォーキングの内容（※平成22年10月17日開催内容）

①受付期間	石段マラソン・ウォーキング 平成22年7月26日から平成22年8月31日（当日消印有効） 締切日以前でも定員に達した場合には、申込を締切る。
②募集定員	石段マラソン全国大会 300人（先着順） ウォーキング 50人（先着順）
③参加資格	・石段マラソン 年齢16歳以上、性別は問わない。（年齢は平成21年10月17日現在の満年齢） 男女別 1部（16歳以上30歳未満） 2部（30歳以上49歳以下） 3部（50歳以上） ・ウォーキング 年齢、性別は問わない。
④コース	= 石段マラソン全国大会（全長約6km）= 大鳥居（スタート）～手向街中・宿坊街～林道～五重塔～石段～合祭殿でゴール = 石段ウォーキング（全長約1.9km）= 随神門～石段を歩く～合祭殿でゴール ※歴史の街宿坊街を歩こうの部もある。
⑤参加費	石段マラソン全国大会 一人3,000円 高校生は1,500円 ウォーキング 一人1,000円
⑥表彰	各部門いずれも1位から6位まで表彰。ほかに最年長賞、遠来賞、ラッキイ賞など地元特産品（純米酒、庄内柿、庄内米等）を準備。 また、ゴールした選手には芋煮を振舞う。参加賞としてオリジナルTシャツ、やまぶし温泉ゆばかの無料入浴券も贈呈。
⑦主催	出羽商工会、羽黒地区地域振興活性化事業推進協議会
⑧共催	鶴岡市、出羽三山神社、JA庄内たがわ羽黒支所、羽黒観光協会、羽黒走友会、羽黒やまびこ会
⑨後援	各関係協力団体
⑩主管	羽黒山石段マラソン全国大会実行委員会

これまで、県内外より多くの方々に参加してい

第十回大会から

しとして「日本一」の石段を有する羽黒山表参道を使い、スポーツという文化を通じた全国に発信できるイベントをつくり上げること。もう一つは、恵まれた資源が豊富な羽黒地域の魅力を、もっと地元住民に感じてもらい、地域活力の向上につなげ、地域の総合的な振興・発展を図ることである。

ただき、昨年十月十七日の第十回大会では、マラソンが三百三十四人、ウォーキングが四十九人の参加を得た。

遠くは四国（徳島県）、北陸、関東周辺を含む県内外から多数の参加申し込みがあった。

大会当日、参加ランナーは好天の絶好の条件の中、山伏の「ほらがい」を合図に大鳥居前からスタートし、健脚を競い合った。

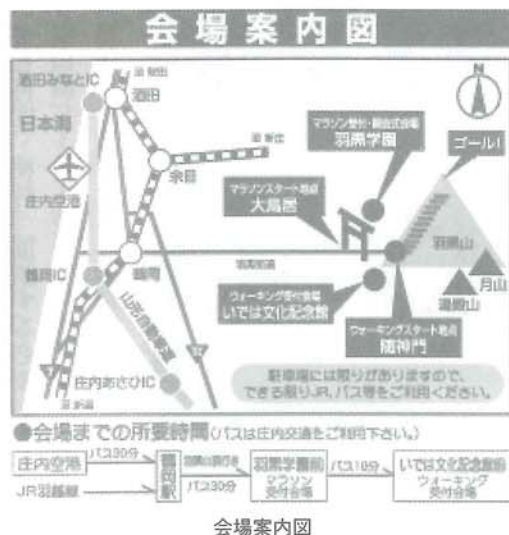
中には、はだしてスタートからゴールまで走ったランナーや、七十歳以上で完走したランナー、

第一回大会から十回大会まで連続出場ランナーがいた。

ゴール地点では商工会女性部が地元特産の芋煮

表2 大会ごとのマラソン大会参加者の推移

第1回大会（H.13年）126人	第6回大会（H.18年）229人
第2回大会（H.14年）132人	第7回大会（H.19年）254人
第3回大会（H.15年）145人	第8回大会（H.20年）253人
第4回大会（H.16年）146人	第9回大会（H.21年）365人
第5回大会（H.17年）223人	第10回大会（H.22年）334人



【成果】

石段マラソン全国大会は、全国から多くのラン

大会の成果と今後の課題

をランナーに振舞った。今や大会は地域を代表するイベントとして、地域振興の一助となっている。今回、節目の十回大会であることから、実行委員会から、参加した選手全員に、石段を駆け登っている写真を選挙個人に記念品として贈呈した。

一方、「石段ウォーキング」と「歴史の街宿坊街を歩こうの部」のいずれも好評だった。

大会の運営については鶴岡市、出羽三山神社、羽黒高校、JA庄内たがわ、羽黒町観光協会、羽黒走友会、羽黒やまびこ会の共催をいただき、各関係機関の協力で事故無く、ランナー全員完走して成功裡に終えることができた。

ランナーらは、お互いの健闘を称え合い、次回大会の開催を期待していた。

ナーが参加するため、町の特産品を賞品とすることにより地場産品のPRの場として大いに貢献している。マスコミからも大いに取り上げられ、同日開催の門前大市のにぎわいにもつながった。参加者からの声は「来年もぜひ参加したい」というのがほとんどだった。また、マラソン愛好家に人気がある月刊誌への大会情報の掲載により、参加希望の問合せが多くなり、全国への情報発信による効果が拡大した。

また、誘客のためのイベント実施は、商工業者と町内の各種団体、関係機関や地域住民が一体となって取り組むことができ、交流・連携が図られ、商工業の振興、町の活性化に結びつくものであると考えている。

【課題】

①第一回大会から年々参加者が増加し、対応してきたスタッフの協力が増々不可欠となってきた。

参加ランナー五

百人規模の大会開催に向けて、参加ランナーが増加することにより、ゴールにおける選手の記録は計測システム（RCチップ・RTタグ）を利用して、より正確に計測すべきである。ただし、チップ方式の導入につ

いては、多額の経費支出が見込まれるため、資金の確保手段が今後の検討課題である。

②県外参加のランナー並びに家族同伴で応援に来られる方については、地域振興の目的から、地元宿坊等への宿泊、観光地巡りをさせていただけると期待していたが、交通機関が整備され、日帰りのケースがほとんどである。

また、県内参加ランナーの場合も、道路網が整備されたことからスタート時間近くに到着し、ゴールとともに観光地巡りをせずに帰ってしまわれるケースがほとんどのようである。

これらの改善が今後の検討課題である。

③マラソン大会による地域活性化よりも、さらに検討しなければならぬのは、同日開催の門前大市の中身の充実と考える。マラソン参加者はゴールし、閉会式に出席し、成績を確認して帰りの途に着くのが大半である。門前大市まで来てもらう工夫が重要であり、今後は実行委員会などに

においても再度、検討、協議する必要がある。



国宝五重塔



参道を駆け上がるランナー



参道を駆け上がるランナー

「館山若潮マラソン大会」による地域活性化



館山市教育委員会スポーツ課
スポーツ振興係 係長
川名茂樹

館山市の概要

館山市は千葉県南部に位置し、東京から百キロメートル圏内にありながら、夏涼しく冬暖かな気候と豊かな自然に恵まれた、避暑避寒の地である。また、江戸時代の戯作者・曲亭（滝沢）馬琴が著した「南総里見八犬伝」のモデルである、戦国大名里見氏ゆかりの史跡が残る、歴史とロマン漂う地でもあり、年間を通じて多くの観光客が訪れている。

館山若潮マラソン大会の概要

「館山若潮マラソン大会」は、豊かな自然をコースに取り込み、市民の健康・体力づくりや観光都市館山のPRおよび地域経済の活性化を目的に館山市・館山市教育委員会・館山市体育協会が主催し、毎年一月の最終日曜日に、全国各地から多くのランナーを迎えて開催されている。

種目は、日本陸連公認コースの「フルマラソンの部」「十キロメートルの部」と「ファミリーの部（二キロメートル）」の三つで、今年で三十一回を数える。

大会の経緯

「館山若潮マラソン大会」は、昭和五十六年に第一回大会を開催し、種目は「二十キロメートルの部」と「十キロメートルの部」があった。第二回大会（昭和五十七年）で「二〇キロメートルの部」を「二十五キロメートルの部」に、第六回大会（昭和六十一年）より「二十五キロメートルの部」を「フルマラソンの部」に変更し、第七回大会（昭和六十二年）より「フルマラソンの部」が日本陸連の公認コースとなる。第十五回大会（平成七年）から親子などの家族でマラソンに親しんでもらおうと「ファミリーの部（二キロメートル）」を新設。第二十二回大会（平成十四年）より「十キロメートルの部」が日本陸連公認コースとなり、

現在に至っている。

参加者数は第一回大会が六百二十三人で、回を重ねるごとに増え、第十六回大会（平成八年）では、第一次ランニングブームもあり、五千二百十六人にまで増加した。しかし、この大会をピークに参加者は徐々に減り、第二十一回大会（平成十三年）は、三千八百五十人にまで減少し、その後は、しばらく四千人数前後で推移した。

第二十九回大会（平成二十一年）以降、フルマラソンの部の制限時間の延長や第二次ランニングブームの影響により、参加者が急激に増加した。第二十九回大会は、五千二百五十一人、第三十回大会（平成二十二年）は、七千四十七人、そして、今年開催された第三十一回大会は、八千三百八人（申し込みは九千四百七十人）となった。

大会の魅力

「館山若潮マラソン大会」の魅力は大きく分けて二つある。

一つ目は、「自然豊かで変化に富んだコース設定」である。①美しく波静かな様子が鏡のようであることから別名「鏡ヶ浦」と呼ばれ「日本の夕陽百選」「関東の富士見百景」「東京湾100選」に選ばれている館山湾②大島・伊豆諸島・富士山を望むことのできる海岸線③約六キロメートルにおよび菜の花など早春の花々が咲き乱れ「日本の白砂青松百選」「日本の道100選」に選ばれている房総フラワースライン④後半のアップダウンの激しい山間コースなど、潮風を体いっぱいを感じ、早春の花の香りを楽しみながら、館山の自然



フルマラソンのスタート



ボランティアのおもてなし



鏡ヶ浦と富士

を満喫できるコース設定となっている。

二つ目は、「地域あげてのおもてなし」である。

館山若潮マラソン大会のスタッフ、総勢九百四十人は、地元スポーツ団体、中・高校生、青少年相談員などのボランティアスタッフが構成されている。大会は、ボランティアスタッフが笑顔で親切丁寧にランナーをもてなすほか、多くの市民が沿道で暖かく熱のこもった声援を送っている。

コース上にあるエイドステーションでは、スポーツドリンク・水・バナナ・塩・飴・スポンジ・地元特製クリームパンが用意されるほか、市民ボランティアによる私設エイドステーションもあり、皮むきミカンやおにぎりなどが配られるなど充実している。

また、スタート・フィニッシュ地点となるメイン会場では、無料で豚汁・麦茶・おしるこ・焼き

芋なども配られ、疲れて冷えたランナーの体と心を温めている。

ボランティアスタッフとして参加した人は「ランナーから『ありがとう』と言われると、応援している自分が元気になる。これがあるから、毎年ボランティアをやめられない」と話す。ボランティアスタッフのおもてなしの気持ち、ランナーとの触れ合いが、大会の魅力を支えていると考えている。

また、大会前日には、マラソン解説等で有名な金哲彦さんによるマラソンクリニックや豪華賞品が当たる抽選会などの前夜祭が開かれ、大会を一層盛り上げている。

経済効果

「第三十一回館山若潮マラソン大会」の経費は、

約三千万円であるが、第三十回大会から参加料等の大会収入のみで大会運営ができていた。また、観光庁の「全国観光入込客統計データ」の観光消費額単価をもとに試算すると、一億円を超える経済効果がある。ランナーだけでなく、その家族や応援者も館山入りするため、実際、市内の宿泊施設は、ほぼ満室状態であり、土産・飲食・公共交通などに与えるその経済効果は多大である。

今後の課題と方針

「館山若潮マラソン大会」のフルマラソンの部は、コースの一部で迂回路のない生活道路・観光道路があり、ランナーと車両が併走する状態となる。そのため、今後は、ランナーの安全と沿道住民・観光客に配慮した交通対策を講じる必要がある。

これらの課題を克服し、ボランティアによるホスピタリティ溢れる「手作りのマラソン大会」の良さを発揮し、近年のランニングブームに対応した大会運営をしていきたいと考えている。

スポーツアイランド

佐渡市の取り組み

佐渡国際トライアスロン
大会事務局

川内 博

佐渡島の面積は、八百五十五・二七平方キロメートル。東京二十三区の一・四倍、沖縄本土に次いで国内では二番目に大きい島である。

佐渡では、近年、トキの生息地として野生復帰への取り組みを行うなど、環境に優しい島づくりを展開しており、平成元年から続く「佐渡国際トライアスロン大会」（平成二十三年は、九月四日開催予定）や、平成十八年から始まった美しい海岸線の佐渡を一周するサイクリングイベント「スポニチ佐渡ロングライド210」、そして、平成二十二年に産声をあげた「佐渡トキマラソン」を開催。「トキの舞う美しい島」「環境の島・エコアイランド」「スポーツの島」を共通テーマとして実施される各イベントは、環境と自然にやさしい大会として各方面から注目されている。

佐渡トライアスロン大会開催までの経緯と主旨

一九八〇年代に「佐渡島の活性化と観光の島・佐渡を全国にむけて発信する」ビッグイベントを

開催しようという計画があり、あらゆる方面から調査が始まった。

平成元（一九八九）年の八月に「佐渡島全体を使ったロングディスタンス（長距離）・トライアスロン大会の開催」という提案を当時の競技団体から受け、島内十の市町村をはじめ警察、消防署、海上保安署などの各関係機関と十分な協議を重ねた結果、次の二点により、平成元年の開催が決定した。

1. 「歴史と文化の島・佐渡」をキャッチフレーズに島の観光事業とあわせてトライアスロン大会を開催することによって「佐渡」を全国にアピールし、島の発展に大きく貢献できる。
2. 若者から中高年まで幅広い年代層が参加できるトライアスロン競技は「明るい佐渡」のイメージを打ち出すのに絶妙なイベントである。

佐渡トライアスロン大会の推移

▽平成八年（日本選手権大会の実施

佐渡大会の実績と運営面、島の持つ競技コースの良さと景観、そして島民の熱心な応援のすばらしさが選手・役員に評価された。

▽平成十年（ITUロングディスタンストライアスロン世界選手権佐渡大会の開催

アジアで初めての世界選手権大会。世界二十九カ国から約二百五十人の選手・役員が参加し大成功を収めた。同時に海外の報道機関も多く来島し、世界百三十カ国に大会の情報、佐渡の文化が発信された。

▽平成十二（二〇〇〇）年（シドニーオリンピック）でトライアスロンが正式種目として実施された。

▽平成十四年（ジュニアトライアスロン大会実施）小中学生を対象にジュニアトライアスロン大会を実施している。

▽平成十九年（環境の島・エコアイランド）エコーカー（燃料電池自動車）による大会サポート環境にやさしい島の大会として環境省から燃料電池自動車（一台）、電動車両普及センターから電気自動車（電動バイク四台含む十三台）によるラン競技のサポートを行った。トライアスロン大会での使用は全国で初の取り組みとなった。

佐渡市の取り組みの紹介「トキの舞う美しい島」「環境の島・エコアイランド」

大会式典会場でトキの野生復帰に向けた取り組みの紹介、佐渡の文化遺産の世界遺産登録運動の紹介、電気自動車の展示による環境保護のアピールなど大会を通して佐渡市が取り組んでいる代表的なことを紹介する展示ブースを設置

した。

▽平成二十一年の新潟国体でトライアスロンが公開競技として行われた。

スポニチ佐渡ロングライド210

佐渡市合併後の平成十七年に地域振興、交流人口の拡大を目的に開催した。合併の十年ほど前に自転車イベント開催の提案を受けたが、実現には至らなかった。合併し「佐渡市」になったことをきっかけに、佐渡の素晴らしい自然を生かした自転車イベント開催に向け、計画を推進し、主催者、各種関係機関・地元ボランティアの協力により開催することができた。

佐渡ロングライドは、佐渡の自然、文化をフルに活用した佐渡一周コース、半周コースなどを設定しているが、特に佐渡一周コースは多くのサイクリストから人気があり、募集開始から一カ月程度で定員に達する状況で、北は北海道、南は九州



トライアスロン



給水



佐渡トキマラソン

や沖縄県から約三千人が参加する日本最大規模の大会へと成長した。

また、参加者からは、佐渡までのアクセスの利便性に配慮し、首都圏からの臨時列車やバスツアーを企画し、島内各埠頭からのシャトルバス、バイク輸送トラックの配車なども行い、好評を得ている。

平成二十三年は五月十五日に開催予定。

佐渡トキマラソン大会の開催

近年、市民参加型の大規模シティマラソンである東京マラソンの開催や健康ブームに乗り、市民ランナーが増加しており、現在は首都圏開催のマラソンだけでなく、全国のマラソン大会で軒並み、参加者が増加する状況となっている。

佐渡におけるマラソン大会は平成十六年の合併前の市町村区域で佐渡市民が参加するマラソン大会を数多く開催しているが、従来大会の最長は十キロメートルコースであることから、佐渡初のフルマラソン大会で制限時間は初心者でも参加

しやすい七時間（ハーフマラソン三時間三十分）に設定して島外からも多くの参加を見込めるよう大会を計画した。第一回大会は平成二十二年四月十一日に開催。

今後の課題と方向性

現在佐渡市が実施しているスポーツイベントはいずれも規模が大きく、広大な島をフルにコースとして実施している。それにともし膨大な運営スタッフも必要となっているが、若年層の減少などによりスタッフの募集が今後の課題となっている。少人数でも運営できるよう業務内容の見直しや、競技コースの変更などが必要となっている。

また、佐渡市ではスポーツツーリズム推進連絡会議を立ち上げ、スポーツを媒体とした観光客の誘致に関する総合的な取り組みを推進することとなり、スポーツイベントを通じて、地域スポーツ振興はもとより「競技スポーツと生涯スポーツ」両面の調和のとれた発展、イベントを活用した観光振興や交流人口の拡大など、佐渡の魅力が高まることにより、さらなる地域発展につなげたいと考えている。

今後は安全対策への取り組みや参加者には大いに楽しんで頂けるよう佐渡らしさの創出、地域の活性化と健康増進に寄与したい。

注・東日本大震災の影響により三月二十七日開催予定だった佐渡トキマラソン大会は中止となった。

感動を後世に

―長野オリンピック記念長野マラソン大会―



長野マラソン大会組織委員会
事務局長
大西健文

長野オリンピック記念長野マラソン大会は、その名の通り長野冬季オリンピックが開催された翌年の平成十一（一九九九）年に始まり、毎年四月中旬に開催している。第一回大会のエントリー数は五千六百六十三人だったが、今では八千人を超える大会に成長。最近の三大会は募集開始からわずか一日で定員に達した。「長野の皆さん、素晴らしい大会をありがとう」。ランナーから熱いメッセージが寄せられている。

世界でただ一つの大会

長野マラソンの母体は、「信毎マラソン」。信濃毎日新聞社（信毎）主催の大会で、平成十（一九九八）年で幕を閉じたが、四十一回の歴史を重ね、「新人の登竜門」に位置付けられていた。長野オリンピック開催を機に、オリンピックの感動とその精神を後世に伝えようと、日本オリンピック委員会、日本陸上競技連盟、長野県、長野市、信濃毎日新聞社が主催する長野マラソンに生まれ変

わった。

「オリンピック記念」という名称が付いた大会は、世界でただ一つしかない。長野マラソンをオリンピック記念の大会にという熱い思いが、多くの関係者の賛同を得て、国際オリンピック委員会（IOC）のサマランチ会長（当時）らとの協議を経て実現した。第二回大会から男子優勝者に贈られているIOC会長杯は、純銀製のカップにオリンピックマークが刻まれている。さらに、マラソン発祥の地ギリシャのアテネクラシックマラソンとも友好提携を結び、毎年、双方の大会にそれぞれの国の選手を招待しているのも特徴だ。

海外からも二百人

国内外からの招待選手に加え、市民ランナー八千人は北海道から沖縄まで全国各地にわたる。海外からの参加も年々増え、十三回大会は約二百人にのぼる。前日受け付けのため、長野市のホテルは満杯となり、県内の下高井郡山ノ内町や上田市

などに宿泊しているランナーも多い。

「桜や桃の花、残雪の北アルプスも見られ、美しい景色の中を走れる」「絶え間ない大声援とハイタッチの嵐でテンション上げまくり」「地元の人のかさ、信州そばのおいしさも、観光も、温泉も、何から何まで最高の大会」。

ランナーから寄せられた感想の一部だが、長野マラソンは単なるスポーツ大会にとどまらず、長野県、信州の良さを多くの人たちにアピールできる格好の場になっているのではないだろうか。家族で温泉に泊まり、レースの後は善光寺などを散策するというリピーターも増えている。長野市民と全国各地の人が、マラソンを通して交流できる場でもあり、地元市民ランナーの中には「この大会は長野の誇り」とまで言ってくれる人がいる。



長野運動公園を一齐にスタートする8,000人の選手たち

大会を支えるボランティア

こうした大会を支えているのが、長野オリンピックで育ったボランティア精神だ。ボランティアは大会準備から給水、手荷物受け付けなどの本番まで約三千人が活躍している。長野オリンピックから十三年を経て、ボランティア団体の中には高齢化が目立つ団体もあるが、その精神は若い人にも受け継がれ、最近では中高校生のボランティアが増えている。

長野運動公園をスタート、長野オリンピックのスピードスケート会場になったエムウェーブなどのオリンピック施設を巡り、フィニッシュは開閉式会場となった南長野運動公園のオリンピックスタジアム。コースの沿道には、太鼓やコーラス、吹奏楽などのグループが趣向を凝らした応援を繰り返し、市民が「がんばれ」の声を送る。長野



春の信濃路は、菜の花が咲き乱れ、ランナーを癒やす



沿道では市民が駆けつけ、声援を送る



ゲストの高橋尚子さんも走り、ランナーを激励

市商工会議所を中心に構成している長野マラソン支援実行委員会の呼び掛けで、多くの市民が参加し、絶え間ない応援でランナーを励ましてくれる。「とにかく声援がすごい」「沿道の応援が素晴らしい」、涙が出そうになりました。四十二・一九五キロ、制限時間五時間と闘うランナーたちに勇気を与えている。

長野らしさを大切に

全国各地で市民マラソン開催の動きが活発化している。全国、世界各地からランナーを呼び込み、地域活性化につなげようとの試みだ。東京マラソンがマラソンブームに火を付け、全国のフルマラソン完走者は十六万人を超えている（月刊誌「ランナース」二〇〇九年調査）。ランニング人口は千四百万人ともいわれている。全国各地で開催されるフルマラソン大会は、百カ所以上に及ぶ。各

大会主催者はその経済効果を期待し、さまざまな

大会盛り上げの方策を競い合っているのが現状だ。

他地域に先駆けて始まった長野マラソンは、今では専門誌に「国内屈指の人気大会」と紹介されるようになったが、運営は決して楽ではない。地下鉄などが発達している大都市での大会と違って、ランナー輸送にシャトルバスを使わざるを得ない、広いコースがとりにくいなど、地方都市の悩みを抱えながら試行錯誤の連続である。長野オリンピックの遺産「長野オリンピック記念基金」も底をつき、十二回大会からは補助金がゼロに。長期的な景気低迷の中で大会スポンサー探しにも苦心しており、厳しい財政での運営を強いられる。

それでも人気が高いのは、ランナーが満足してくれるきめ細かな大会運営と、「オリンピック記念」の名にふさわしい豊かな国際色、春の信濃路の美しい風景、ボランティアに象徴されるホスピタリティが支えになっているからだろう。今後

も長野らしさを大切に、より地域に密着した大会をめざしていきたい。

注・東日本大震災、

長野県北部地震、福島原発の事故の影響により、平成二十三年四月十七日開催予定だった第十三回大会は中止となった。

みんなでつくりあげる

「いびがわマラソン」

揖斐川町教育委員会スポーツ振興課
主査

高橋良尚

揖斐川町の概要

揖斐川町は、岐阜県の最西部に位置し、北側は福井県、南側は不破郡、揖斐郡池田町、大野町、東側は本巣市、西側は滋賀県と接している総面積八百三平方キロメートル、人口二万五千人の町である。町の南西部から北西部にかけては、標高千百〜千三百メートル前後の山々がそびえる。その山間を縫うように揖斐川が流れ清流のシンボルであるイワナやアマゴ、アユなどの魚が生育する自然豊かな町である。

また、揖斐川町には日本最大の貯水量を誇る徳山ダムをはじめとして、横山ダム、久瀬ダムがあり水力発電による電力供給と治水の役割を果たしている。

いびがわマラソンのはじまりと歩み

揖斐川の両岸に沿って道路が走っており、昔は

右岸が上流と下流をつなぐ動脈であった。左岸の国道三〇三号線が規格の高いものに整備されると、右岸道路は利用価値も交通量も激減した。地元のマラソンに対する意識は、当初、「この道を利用すればマラソンができるのでは」と当時の町長や中日新聞の関係者が少し話題にする程度だった。

しかし、バブル景気に沸いていた昭和の終わりがろ全国各地で地域おこしのイベントがさかんに企画されるようになると、マラソンは「揖斐川町の名前をPRしたい。地域おこしのために何か企画したい」と考えていた揖斐川町の思惑にぴったりのだった。

さらに、西濃地区陸上競技協会にも魅力のある企画だった。西濃地方には大きな長距離の大会がなかったことから、県民にランニングやマラソンに親しんでもらい、かつ選手層の裾野を広げる格好の大会と考えた。そこで地域住民の賛同をえて、揖斐川町、中日新聞社、西濃地区陸上競技協会の三者で実行委員会を組織し準備を進めた。

昭和六十三年に第一回いびがわマラソン（フル・ハーフ）が開催された。東海三県で初めての日本陸上競技連盟公認コースの大会として注目を集め、全国各地から三千四百人を超えるランナーが晩秋の揖斐川沿いのコースを駆け抜けた。ボランティアの確保も住民の積極的な協力で約八百四十人の参加があった。東海道新幹線、名神高速道路といった幹線から遠く離れ、交通の便がけっして良いとは言えないハンディも問題にならなかった。マラソンがブームになってきていたこともあり若干の増減もあったが、第十回（平成十年）大会までは右肩上がりに参加者が増え、同大会では九千三百十一人のエントリーを受けた。第十一回（平成十一年）大会ごろから近隣で大会が増えてきたこともあって徐々に参加者が減りはじめ、第十八回（平成十七年）大会では五千四百六十八人まで落ち込んだ。

当時の実行委員会では「なぜ」減ったのか、さまざまな有名市民大会を視察に訪れ研究した。結果としてハード面は違うが、ソフト面では決して負けていない、いびがわらしさを前面に出せば大丈夫であることを実感。気持ちをあらたに「おもてなしの心届けます」を合言葉にして第十九回（平成十八年）大会を開催した。この年は参加者数も増え、雑誌ランナーズの全国ランニング大会百撰では第五位に選ばれた。

それ以降、徐々に参加者が増加し、第二十二回（平成二十一年）大会より参加者、コースの安全を考慮し、一万人の定員制を設けてエントリーを受けられる大きな市民マラソンとなった。

また、始まった当初に児童生徒として沿道で応

援していた子どもたちが大人になり、自分たちも何か手伝いたいと積極的にボランティアに協力してくれるようになった。年数がたち参加者の増加に伴いボランティア数も千八百人に増加し、町の一大イベントとしてさまざまな場面でおもてなしを届けている。

第二十三回（平成二十二年）大会の取り組み

いびがわマラソンでは、これまでにさまざまな取り組みをしてきた。ここでは、平成二十二年十一月十四日に開催された第二十三回大会の取り組みを紹介していきたい。

・学校応援・地域応援

大会前は町内の保育園、幼稚園、小中学校、高校の児童・生徒が手作りの横断幕やポスターを作製し、ランナーを迎える準備をしている。大会当日は、横断幕やメガホン、太鼓、楽器を手にさまざまなアイディアで応援。また、ランナーとのふれあいを大切に考え、沿道でのハイタッチだけではなく、写真入完走認定証と同封される「いびっ



いびがわマラソン大会



沿道の声援に応えるランナー



マラソンの雰囲気味わうウォーキング

このお手紙集」も作成している。コース上の各地域では和太鼓、バンド、よさこいなどの特色ある応援を行い、ランナーを勇気づけている。

・いびがわウォーキングの開催

ランナーの家族や応援者、観光客、ウォーキング愛好者を対象にマラソンの雰囲気味わってもらおうと第十五回（平成十四年）大会から行われている。会場周辺（一部マラソンコース）の町並コースを約三キロメートル歩く（定員千五百人）。いびがわを楽しもう

揖斐川町の魅力を満喫できるようにメイン会場の揖斐川町中央公民館から町内各地へ臨時バスを運行している。

身も心もリフレッシュしてもらえよう主な運先行先は伊吹山の麓で薬草を使った薬草風呂が堪能できる「かすがモリモリ村」、人気の温泉「藤橋の湯」、日本一の貯水量を誇り日本一景観が美しいとされる「徳山ダム」、そして名刹、谷汲山の「もみじまつり」の四つ。

また、揖斐川町の「食」の魅力も味わってもら

ため、多くの特産品開発グループや農業婦人クラブ等がバザーコーナーに出店して大変盛況である。
・安心、安

全な大会に

参加者に安心して走っていただけるように医療体制を充実させた。フルマラソンの各キロメートルポイントごとにAEDを持った東海医療工学校専門学校、岐阜大学看護学科の学生に立ってもらい、緊急時に備えた。

また、コースを七つのエリアに分け、自転車によるAED隊（医師、救急救命士、看護師などで組織）の巡視も行った。

さらに、日医ジョガーズ、一宮医師会のメンバーにドクターランナーとして協力を依頼し、走りながら参加者の見守りを行った。

これからのいびがわマラソン

いびがわマラソンがここまで続けてこれたのも、関係者をはじめ、それぞれの団体や企業、地域住民の方々の二十三年もの長きにわたる協力、ランナーの声を反映し少しずつ改善を積み重ねてきた結果からである。

「いびがわマラソン」が単なるスポーツイベントではなく、「町の魅力発信」「ランナーや応援者、観光客、都市住民との交流」「地域の活性化・地域おこし・地域連帯感」の促進・醸成に大きな役割を果たしている。幼児期から「いびがわマラソン」に様々な形で携わることが、「町のために自分が参画する」というDNAとして町民の意識の中に埋め込まれ、当大会のみならず、町や地域の諸イベント、行事、活動に積極的に参加してもらえるような住民協働の町づくりにつながる事が究極の願いである。

目に、おなかに、心にもぐちそう —大阪ごちそうマラソン—

大阪の港区には筋肉商店街がある

大阪の地域社会を支えているのは江戸時代の大坂三郷より連綿と続く地域振興会という組織だ。

いわゆる「町会」であるこの組織は、世帯加入率が現在でも八割を超えており、地域社会の代表的代弁者としての機能を持つ。しかし、その活動の多くは中小自営業者を中心とした時間的余裕のある住民の献身的な活動によって支えられていたが、近年の経済不況はこの自営業者に地域活動のゆとりを許さない状況を作っており、同様に地域社会のもう一方の担い手であった商店街などの小売商も疲弊が激しく、地域活動の舞台は慢性の人材不足に悩まされている。

こうした中、平成十八年に商店街と地域住民とが一緒にイベントづくりを行う事により、地域に眠る人材の掘り起こしと、地縁組織と接点の少なかったテーマ別市民団体であるNPOなどの小グループも街づくりに参加出来るプラットフォームを



筋肉商店街実行委員会
フロデューサー
藪井 寿一

目指し「大阪市港区」という人口八万人規模の地域をフィールドとした「筋肉商店街実行委員会」が設立された。

大阪マラソンを港区へ

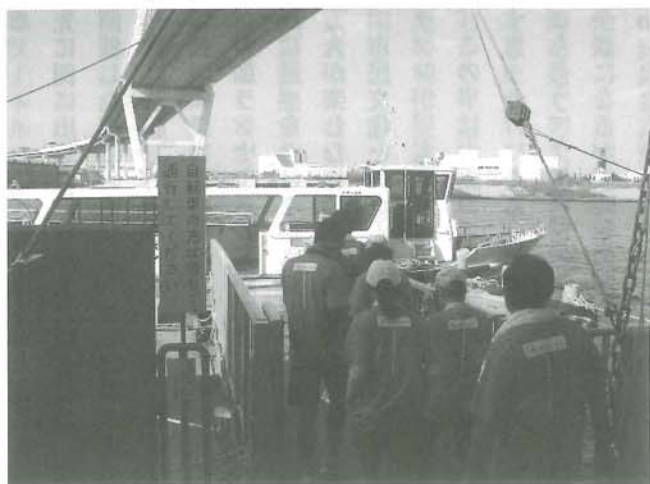
全国各地で様々なキーワードを用い、地域活性化が図られているが、この筋肉商店街ではスポーツという普遍的なテーマで、利害関係の混在する地域社会をつないでいく事を一義的な目標とした。

そうして作られたイベント群の中に、繁栄商店街振興組合のアーケード内を使った百メートル短距離走競技会「韋駄天商店街」があり、このイベントがきっかけとなって平成二十二年には同商店街内に鍛内佐斗司東京藝術大学大学院教授の手による韋駄天尊像が建立された。同時に筋肉商店街はスポーツを使って地域文化を発露させる絶好の機会として、まだ計画準備中だった「大阪マラソン」の港区へのコース誘致活動を開始した。

当時地域の中で大阪マラソンの認知度は非常に

低かったが、八人のコアメンバーで始められた活動は、僅かな期間で地域全域に広がり、活動開始四カ月で一万一千人を越える誘致賛同署名を集めた。これは港区の全人口の八分の一を占めており、三年前の世界陸上大阪大会を無関心のまま迎えた大阪人が、官製か自発的かで極端な反応の違いを見せる事を表している。

この港区での動きが、大阪マラソンに対する唯一行われたコース誘致活動だったが、府と市はこれを取り上げず、残念ながら誘致はならなかった。しかし、市民マラソンが住民生活の場である公道を使って行われる事から派生する社会性の高さに着目した筋肉商店街では、地域社会を文字通り繋いでいくイベントとして、東京で既に取組まれている「東京夢舞いマラソン」を参考に「交通法規遵守のマラソン大会」を企画。区内商店街組織と、



大阪名物の渡し船もコースに入っている

区行政、大阪商工会議所支部、等と合同で実行委員会を組織し、十一月二十一日に「大阪ごちそうマラソン」を開催した。

大阪ごちそうマラソン

ごちそうマラソンは港区、此花区、西区と行政区域を跨がった全長二十四キロメートルのコースを「目に、おなかに、心にもごちそう」をテーマに、海遊館やユニバーサルスタジオ等のベイエリ



商店街を開放して行われる「韋駄天商店街」は地域の名物になりつつある



元土佐藩邸跡の土佐稲荷神社では坂本龍馬も待っていた

アスボット、三菱財閥の岩崎弥太郎にゆかりのある土佐稲荷神社や京セラドーム、渡し船や川底トンネルなども利用して行われた。そして最大の特徴がコース上にある各地区五つの商店街内で（商店街内は歩行が条件）ランナーに補給食として振舞いが行われた事だった。

企画の柱として「走られる地域が楽しむ」事があり、募集ランナー三百人をダシにして二十二万人の地域住民が楽しむことで、地域間のつながりを構築する事が、このマラソンの最大の社会的テーマと考えていたが、運営の中心にあった商店街側がほぼ持ち出しでの「ご接待」を楽しんで取り組んでいた部分だけをとっても「与える事で喜びを分かち合う」人間的な部分が非常に前に出たイベントとなった。

自分の街でワクワクしよう

大阪で最も特徴的な地域資源は大阪人自身であり、通天閣も大坂城のエレベーター付天守閣も大阪人が大騒ぎをして造り上げたもので、この住民気質こそが大阪の最大の武器で



各商店街では競う様に補給食が振る舞われた（写真は此花区春日出商店街）

ある。

先に例に出した世界陸上大阪大会が、ただ大阪で開催しただけのイベントとして過ぎ去った結果に非常に落胆している一人として、私は今夏行われる大阪マラソンに危惧と期待の両方を持っている。参加ランナー三万人が二百六十六万人の大阪市民に迷惑をかけながら走るのではなく、二百六十六万人が楽しむ為に三万人が大阪の街を走り抜ける。市民文化とスポーツが一番近づく競技であるマラソンが、大阪文化のストリート博覧会と化せば、この事は大阪の地域力が再び齒車の噛み合い出すきっかけになるはずであり、その一例を我々のごちそうマラソンは提示したのだと考えている。

余談になるが、昨年の開催時に、港区の神社3社から曳き太鼓がコース上に集結して、ランナーへの応援を行う企画も実現できた。他の地域の人から見ればそれほどのトピックではないが、港区が干拓により出来上がった三百年の歴史の中で神域を越えての集結は初めての事で、当然地域の間ではこの事が最も話題となった。非常にハードルの高い調整が必要だったが、これも「マラソン」をダシにしながらだったからこそ成功したと言える。

人が走るだけというシンプルな競技「マラソン」は走る人にも走られる地域にも、非常に大きな活力を与えてくれる魅力的なスポーツだ。我々はこれからもごちそうマラソンを上手く地域間の交流や担い手の発掘に役立てながら、自分の街で笑顔が見られるイベントとして続けていきたいと考えている。

日本唯一、滑走路を走って地域を元気に！

―「萩・石見空港マラソン全国大会」―



益田市産業経済部文化交流課
マラソン全国大会推進室
寺戸 一郎

益田市の概要

益田市は、島根県の最西端に位置し、平成十六年に一市二町の合併（旧匹見町と旧美都町）により新益田市としてスタートした。現在人口は約五万人、面積は島根県一を誇る。益田市は、北に日本海を望み、南は中国山地に至る、山陰と山陽を結ぶ交通の要衝地である。面積の大半は山林に覆われ急峻な山々に囲まれている。

益田市ゆかりの人物としては、歌聖「柿本人麿」や画聖「雪舟」が挙げられる。石見地域は全国でも神楽が盛んで、この地域に伝わる伝統芸能「石見神楽」は軽快なリズムと豪華絢爛な衣装でお客を魅了し、地域には神楽を舞う社中も多く、子どもから大人まで親しみの深い伝統芸能である。

「びっくりー！」づくしの大会

東京マラソンが初めて開催された翌年の平成二

十年十月に島根県の自然豊かな小さな街で、日本でも珍しいマラソン大会が開催された。なぜ珍しいかと言うと、なんと「空港の滑走路」を走る大会だからである。「別に何が珍しいの？」と世間では言っているかもしれないが、決して廃止した空港ではない。れっきとした現役空港での開催だからである。

大会PRのため、滑走路を走るマラソン大会を調べてみたが、開港記念イベントとしてウォーキング大会やマラソン大会を開催しているケースはあったが、定期便の就航している現役空港を利用する大会で、かつ毎年開催しているのは益田市（萩・石見空港）しかなかった。まさしく日本で唯一の大会であるから、「びっくりー！」の驚きである。

驚きはこれだけではない。なんと、発案者は、全日空（ANA）グループ社員。ANAといえば、航空機会社の中でも世界に信頼と実績を誇り安全第一をモットーにされている。その社員の方から「滑走路」を利用する案が出たのである。

「滑走路」といえば嚴重に警備され、立入る事がほとんど出来ないはずだが？

聞くとところによると、ANAでは仕事とは関係なく社員による様々な企画・提案を募集して、ANA総合研究所でこれらを取りまとめて検討し、可能であれば事業化する「バーチャルハリウッド事業」を展開しているという。当時、関西空港で働いていたANAグループ社員が考えたのが滑走路を走るマラソン大会であった。当時の萩・石見空港は東京便が飛び立ってから大阪便が飛んでくるまで約七時間、滑走路が空いている状態であった。この空いている時間を利用しマラソン大会ができないかという企画提案であった。

この提案を受けた時には正直驚いた。現役空港の滑走路を走るという奇抜なアイデアではあるが、規制の大変厳しい「安全第一」の滑走路を一般市民が走ることが本当に出来るのか課題は多かった。また、全国規模の大会の経験もなく、空港滑走路での大会のデータもない中、開催は難しいと思えた。

しかし、益田市にとっても、この大会を契機に空港の利用促進と地域の活性化、スポーツの振興を図ることが出来るのではないかという思いと、提案者の大会に懸ける熱意に動かされ、関係機関との協議を重ねてやつの思いで大会の開催に結びつけることができるようになり、近隣のマラソン大会への視察を経て、第一回大会を迎えることになった。

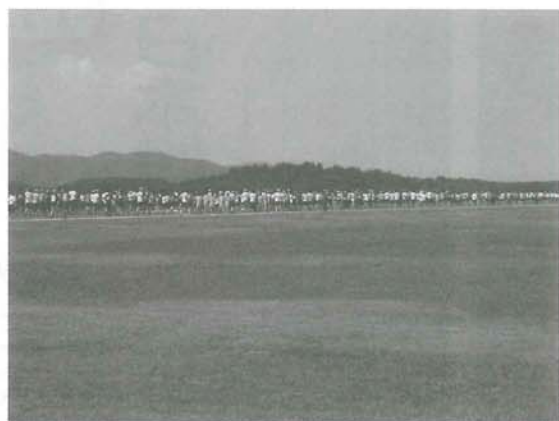
種目はハーフマラソン、十キロメートル、五キロメートル、三キロメートル、二キロメートル（二キロメートルには、小学生・ファミリーが参加）

とし、全てのコースで滑走路が走れ、約三千人募集することにした。ほぼ同時期に開催された東京マラソンは三万人で大会規模も全く違うが、東京マラソンに負けない大会を目指し、第一回大会を開催した。

当日は第一回大会にふさわしい秋晴れの晴天に恵まれ、全国から一都二府三十二県、約二千三百人に参加をいただいた。参加者からは、空港の滑走路を走れたことの喜びや感動の声のほか、地元住民による沿道での応援などについて多くの評価をいただいた。

そして、第一回大会を無事に終えた後に提案者であるANAグループ社員が見せた感謝と感動の涙が、大会運営スタッフの疲れを吹き飛ばし、大会成功への心地よい充実感と達成感へと変わっていった。

第二回大会も晴天に恵まれ、全国から一都二府二十六県、二千五百人に応募をいただいたが、世



滑走路を走るランナー



車いすランナー

間で猛威を振るった新型インフルエンザの影響により、当日は二千二百人の参加にとどまった。またしても目標の三千人を達成することができなかった。

そして、三年目の第三回大会では「目指せ！三千人突破」を目標に準備を進め、東京、大阪、広島で関係者が自作の帽子に飛行機のパルーンを取り付けたコスチュームでチラシを配布するなど、PR活動を強化した。

また、車いすでの参加希望も受け入れることにしたところ、第二回大会時に試験的に参加を受け入れた養護学校の生徒さんが、多くの車いすの方々にこの感動を伝えたいという思いを込め、大会のポスターを自ら作成された。ポスターには「超バリアフリー」のタイトルがつけられていたことが印象的で、市内の各施設に配布したところ、十二人の車いすランナーの参加があった。大会当日には「目標に向かって最後まで走り抜く」と力

強く選手宣誓していただき、車いすランナーの皆さんも滑走路を走れたことに喜びを感じていた。

結局、第三回大会では、一都一府二府二十九県から三千二百三十七人の応募をいただき初め

て三千人を超える大会になり、全国的に認知されてきたことに感激した。種目は、滑走路を走る以外にも日本海、田園、山間地を眺めることができるハーフと十キロメートル（ハーフ千六百七十八、十キロメートル五百六十九人）に人気が集まったようだ。

そして、この大会は滑走路という比較的平坦なコースであるため、障害者の方にも気軽に参加していただける大会であることを実感した。

第一回大会から大会前夜にはウエルカムパーティーを開催。ゲストランナーやランナーの方々、そして地元の皆さんと、益田の特産品を囲んで和やかに催されている。ゲストランナーとしては、有森裕子さんに第一回大会から三年連続で来ていただいているが、その有森さんも驚かれたのが益田市特産の「鴨島ハマグリ」。その大きさ、味の良さにびっくりされていた。

空港利用促進と集客の難しさ

会場の「萩・石見空港」では、益田市・浜田市・萩市・津和野町・吉賀町・阿武町の広域市町が一体となって空港利用促進を図り、それぞれの観光地等への集客につなげるよう取り組んでいる。しかし、便数や他空港との絡みから開港以来思うような集客が見込めていないのが現状である。

この大会を機に空港利用促進と、観光客の集客増につなげばとの思いがある。大会前後三日間はマラソン効果もあり、搭乗率は大阪・東京両便とも一〇〇%である。宿泊客数、温泉利用者的人数も増えている傾向にはあるが、観光客としての



サポートスタッフの中学生



沿道の声援に応えるランナー

集客には結びついていないという状況から、今後は観光とマラソンの連携が課題となっている。

ランナーとの交流力で 「一流の田舎まちマラソン」

萩・石見空港マラソン全国大会は空港まつりと同時開催にもなっており、益田市やその近隣市町より「萩・石見くだおれ市」と題した特産品の販売や飲食ができるブースを設けている。この企画には年々集客数も増え、多くの方から喜びの声をいただいている。

また、「一流の田舎まちマラソン」を目指し益田市民が一丸となり大会を盛り上げているが、参加者へのもてなしと、心配りの取り組みは以下の通りである。

①もてなし講習会の開催

ランナーの皆さんを温かくお迎えし、もてなし

の心を学ぶための講習会を実施。講師として、ANA総合研究所より元キャビンアテンダントの方にお越しいただき、実践も交え熱心にご指導いただいた。

②八百五十人のサポートスタッフ

サポートスタッフには、市民、市民団体、各企業、そして重要な役割を果たす三百五十人の中学生。生徒は、あらかじめボランティア教育を受け、実践の場として参加している。生徒からは、「ぜひまたサポートスタッフとして参加したい。ランナーの皆さんとの交流が何より楽しい」と笑顔で答えてくれた。

そして、ランナーの方からも、「サポートスタッフの皆さんの対応が良い。中学生スタッフの方から元気をもらった」という感想をいただいている。

③沿道での特色ある応援

過疎化が進む中、沿道では小さな子供からお年寄りまでがランナーに手を振りながら声援を送っている。また、和太鼓や、益田ゆかりの人物に仮装しての応援があるほか、自作の小旗を振るデイサービス利用者の方や吹奏楽で応援する中学生の姿も見られる。ランナーにとっては力強い応援で、この大会の目玉にもなっている。

また、幼児から高齢者の方までランナーとして参加いただき、まさしく市民を挙げた大会になりつつある。この大会により多くの市民が関わり交流することで地域も元気になればと思っている。

今後の大会への思い

現在はマラソンブームの影響を受け多くのランナーが参加しているが、今後は今まで以上に魅力ある大会を目指す必要がある。

具体的な対応としては次の三点が挙げられる。

①滑走路と豊かな自然を生かし益田の自然を丸ごと体感できる大会としてフルマラソンも視野に入れて検討する。

②市民と中学生が運営する大会を目指す。学生スタッフは、ボランティア教育の一環として関わり、大人のサポートスタッフや参加選手とのふれあいにより、新たな経験の場、そして一生の思い出作りの一場面となり、将来益田に住みたいと思える大会になればと考える。

③日本一の応援隊として、それぞれの地区ごとに独自の応援で選手と交流し、市民も選手も元気になる大会にする。

こうした取り組みにより「一流の田舎まちマラソン」として市民が元気になる大会を目指し、また、全国で知名度ワースト1の「島根県」を全国の皆さんに知ってもらい、中でも「益田市」のにぎわいを感じてもらいたいと思う。

平成二十三年の大会は十月十六日（日）に開催する。「ぜひ、来て・見て・走って」。

自然活かしウルトラやフルマラソン —約2万人が参加する大会も・中国、四国、九州地方—

編集部

市民マラソン大会を成功させ地域の活性化へとつなげるには、主催者のさまざまな工夫が必要となってくる。中国、四国、九州地方で観光資源や特産品などを活用して開催されている市民マラソン大会の概要を紹介する。

◆◆◆ 隠岐の島ウルトラマラソン

—町のPR、町民の交流促進—

「隠岐の島ウルトラマラソン」は、島根県隠岐の島町で開催されている。

隠岐の島町は、島根半島の北東約八十キロメートルの日本海上に位置する隠岐諸島の島後（とうご）にある。平成十六年十月一日、旧西郷町、旧布施村、旧都万村、旧五箇村の一町三村の合併により誕生した。人口は約一万五千人。漁業が基幹産業で、農業、林業、畜産業も盛んで、町は豊かな自然環境を活かした観光産業にも力を入れている。

同町は平成十七年十月、合併後の町民の結束や新しい町のPR、島の交流人口の拡大と地域振興を目的に、第一回ウルトラマラソンを開催した。

第二回大会からは、六月の第三日曜日を開催日にしている。

大会の種目は、島内を一周する百キロメートルの部、半周する五十キロメートルの部の二つがある。いずれもアップダウンの激しいコースだが、百キロのコースの制限時間が十四時間三十分、五十キロのコースが八時間と制限時間が長めに設定されている。また、沿道からの町民の応援がランナーを後押しすることから、参加者は約八五%の高い完走率となっている。

島外のランナーが大会に参加するには、地理的条件や公共交通機関の関係から、最低でも二日以上の上の島内での宿泊が必要となる。参加料は百キロメートルが一万五千元、五十キロメートルが一万一千円で、いずれも競技中の飲食代、記念品代、傷害保険料、島内循環バス代を含む。

第五回大会では、六百八十三人が参加し、うち五百七十四人が島外からの参加者だった。前日、当日とも地元住民が、日本海の海の幸、島の特産品で参加者をもてなしている。

実行委員会の事務局担当者は「全国に隠岐の島町をPRするイベントとして、着々と根付いてきている」と話している。

◆◆◆ 大方シーサイドはだしマラソン

—観光名所の砂浜をコースに—

四国では、高知県黒潮町が毎年五月三日、海岸の砂浜をコースとした「大方シーサイドはだしマラソン全国大会」を開催している。

黒潮町は、高知県西部に位置し、南西部に太平洋を臨む。海岸線には砂浜百選に選ばれた砂浜がある。平成十八年三月、旧大方町と旧佐賀町の合併で誕生した。農業、漁業の一次産業が主体で、人口約一万三千人。

町は観光名所になっている砂浜をコースに活用して、はだしマラソン大会を開催し、町民と全国のスポーツ愛好家との交流促進を図っている。

大会の種目は、四キロメートル（親子・夫婦ペア、個人の部）と六キロメートル（個人の部）があり、親子・夫婦ペアの参加者は手をつないでゴールしなければならない。各部ともタイムを計測し三位まで表彰するが、競技性よりもイベント性が高い大会で、毎年七百人余りが参加。ほとんどが町外からの参加者で、平成二十二年の二十五回大会では過去最高となる七百五十人が参加した。参加料は親子・夫婦ペアの部四千五百円、個人の部三千円。

また、常設の美術館を持たない町は、砂浜を美術館と見立てた「砂浜美術館」として、さまざまなイベントを開催してまちおこしに取り組んでいる。マラソン大会で砂浜を走るランナーも作品の

一つにとらえている。

大会会場の砂浜では、「砂浜美術館」の一環であるTシャツアート展も開催。全国から公募したさまざまなデザイン画が描かれたTシャツをロープにつるして飾り、大会を盛り上げている。

玉名市横島町いちごマラソン大会

―県下最多の参加者―

熊本県玉名市では、特産品のイチゴの栽培ハウスを沿道に見ながら走る「玉名市横島町いちごマラソン大会」が開催されている。

玉名市は熊本県北西部に位置する人口約七万人の都市。米、野菜、果実などの農産物や、のりなどの水産物の生産が盛んである。

大会は、前身の町民マラソン大会を含め昭和五十三年から開催。地元実行委員会が、健康づくりとスポーツ交流、特産品を通じた交流を目的に回を重ねてきた。

大会の種目は、ハーフ、十キロメートル、五キロメートル、三キロメートル、のんびり（二・五キロメートル）の五つ。大会当日はイチゴの出荷の最盛期。給水所では、イチゴやミニトマトが振舞われる。

会場では、特産物の即時即売会を同時開催。J A、漁協、商工会をはじめ地元生産者団体などが、特産物などを販売する。

ここ数年、県内外からの参加者が増え、平成二十三年二月の大会では、過去最高となる五千八百九十二人が参加。県下最多の参加者をほこる大会となっている。

いぶすき菜の花マラソン

―菜の花、開聞岳の景観活かす―

鹿児島県指宿市では、「いぶすき菜の花マラソン」が、毎年一月の第二日曜日に開催されている。

指宿市は、薩摩半島の最南端、鹿児島湾口に位置し、北側に鹿児島市と接する。人口約四万七千人。市内には霧島火山脈による温泉が湧出し、天然砂むし温泉が有名である。産業では、市内に古くから天然の良港として栄えた山川漁港があることから、鯉節製造業が盛んで、枕崎漁港とならぶ県下の二大産地で全国でも有数の生産地である。

マラソン大会の種目は、日本陸連公認コースの四十二・一九五キロメートルのフルマラソン、十キロメートルの二つが設けられている。参加料は四千五百円。

フルマラソンのコースでは、ランナーは八百万本の菜の花畑、九州最大の湖「池田湖」、薩摩富士と称される「開聞岳」など観光名所の景観を楽しみながら走ることができる。

沿道では、約二千人のボランティアのサポートと市民総出の応援で、ゴールを目指すランナーを励まし元気づける。また、ランナーには、さつまいも、菜の花漬けなどの特産品も振舞われる。こうした長年の取り組みにより、第一回大会で三百六人だった参加者が、第二十九回大会では二万人に増えた。

尚巴志ハーフマラソン in 南城市

―歴史上の人物でPR―

沖縄県では、南城市が平成十四年から、ジョガー

の健康増進のため、「尚巴志ハーフマラソン in 南城市」を開催している。

南城市は平成十八年一月、旧佐敷町、旧知念村、旧玉城村、旧大里村の一町三村の合併により誕生。沖縄本島南部の東海岸、那覇市より南東約十二キロメートルの位置にある。美しい海岸の景観など観光資源に恵まれていることから、市は、「いやしと健康」をテーマにして、体験滞在型の観光振興や健康づくり事業に積極的に取り組んでいる。大会名につく「尚巴志」は、琉球を統一し、琉球王国・第一尚氏王統を打ち立てた英雄。旧佐敷町が出身地で、現在、市のシンボリックな存在となっている。

マラソン大会は、県内外に尚巴志をPRして周辺地域の活性化につなげるという狙いがある。大会は旧佐敷町時代から始まり、これまで九回開催。毎年、十一月月上旬に開催されている。

大会の種目は、ハーフのほか、十キロメートル、三キロメートルの部がある。平成二十二年の第九回大会には、八千九百三十五人が参加した。参加料は大人三千五百円、小人千五百円。

尚巴志ゆかりの地で風光明媚なコースを完走したランナーには全員、完走証と「覇者の証」のメダルが授与される。市内の中学生がメダルのストラップ付けを行うなど、地元市民がボランティアで大会を盛り上げる。また、参加賞として特製のTシャツが配られる。琉球王朝時代にあやかったデザインが参加者に人気があるという。

こうした地元の取り組みもあり、九州最大規模のハーフマラソンで県内屈指の人気がある大会に成長した。

マラソンによる地域活性化

市民マラソン ブームから定着へ

―地域活性化につながるマラソン大会とは―



株式会社価値総合研究所
パブリックコンサルティング事業部
副主任研究員
丸山智由

増える全国フルマラソン大会

平成十九年二月、雨の中、東京のと真ん中を三万人のランナーが駆け抜けた東京マラソンが開催された。第一回大会九万五千人であった申し込み者数は、今年の第五回大会では定員の約十倍の三十三万人を超え、東京マラソンの出場はプレミアムチケットと化している。

この東京マラソン開催をきっかけに、都内では皇居を周回するランナーが増え、シャワーや着替えなどが利用できるランニング施設も数多く作られている。ウェアやシューズなどのマラソン関連グッズの販売店舗、ランニングクラブや教室なども増え続けている。

そして、そのブームは全国各地に広まり、平成十九年の東京マラソン開催以降、新たに十以上のフルマラソン大会が生まれた。さらに今秋には、大阪マラソン、神戸マラソン、そして来年には京都マラソン、ナゴヤウィメンズマラソン、ちばア

クアラインマラソンと次々と新しい大会が予定されており、もはやマラソンはブームというよりはマラソンがライフスタイルの一部として定着してきたともいえる。

日帰りが多いマラソン大会への参加

ランナー数の急増に伴って、首都圏で人気のある大会は、申し込み開始わずか数時間で五千―一万人の参加定員が埋まり締め切られるケースが頻発している。東京マラソンをきっかけにマラソンを走りたくても大会になかなか参加できないランナーも増えており、「マラソン難民」という言葉まで生まれている。これは、首都圏のランナー人口の増加率が他地域に比べて高いことと共に、ランナーの大半は、日帰り可能な大会を選ぶ傾向にあり、宿泊の壁は意外と大きく、宿泊による消費を期待していても、思ったほど経済効果が生じていない大会も多い。

急増する女性ランナーの消費に期待

東京マラソン開始前までは、マラソン人口に占める女性の割合は一割程度である。しかし、今年の東京マラソンの応募者数に占める女性の割合は約四分の一で、女性ランナーは急増している。東京マラソンによってマラソンが身近な存在となり、さらに、美容・健康にもよく、ウェアも充実してファッションも楽しめることで、「美ジョガー」と呼ばれる三十代前後を中心とした若い女性ランナーが増えたことが大きな要因となっている。

今年三月には、女性だけの十キロの大会「渋谷表参道ウィメンズラン」が開催され、日曜の朝、原宿表参道の道路を規制して四千人の女性ランナーが駆け抜けた。この大会も募集開始四時間で定員が埋まるほどの人気で、今後も女性ランナー増加が続くであろう。

さらに、女性ランナーは、男性よりもウェアなどマラソン関連グッズにお金をかけ、宿泊の壁がなく沖縄など観光地の大会へ旅行も兼ねて参加する傾向があり、女性の参加割合が大きい大会ほど、地元への経済効果は大きくなるとも考えられる。

交通アクセスが不便でも、多くの参加者を集めるマラソン大会

十一月から三月は、気温が低く走りやすい気節で、ランナーは、自己記録を目指して、記録の出やすい平坦なコースに参加する傾向がある。一方、夏場は記録が狙えないので、宿泊・旅行も兼ねて、

Photo Album
フォトアルバム

第8回小布施見にマラソン 2010



小布施見にマラソンのホームページ



五島列島タヤけマラソン（ゴール時は日も暮れて幻想的である）



野辺山高原100kmウルトラマラソン（長野県）山道を走る美しく険しいコースで有名

ゆつくり楽しむ大会に参加するランナーも多い。ここでは、夏場に行われる特色のある大会を紹介する。

【小布施見にマラソン】

栗菓子で有名な長野県の小布施町では、七月に小布施見にマラソンが開かれている。この大会は、美術館など観光施設が並ぶ小布施のおもての道ではなく、土手や野道、路地といった、「オフの道」を走るコースとなっていて、ゆつくり楽しんで走ってもらうためにハーフマラソンで制限時間が五時間十分と歩いてもゴールできるくらい長めに設定してある。

沿道の至る所で応援演奏が行われ、コース途中には、果物、お菓子、そしてワインまで置かれている。仮装して走るランナーも多いのがこの大会の特徴で、女性の参加割合が三分の一を超えてい

る。大会は朝七時二十分スタートで、ほとんどの人が宿泊するため、小布施町だけではカバーできず、長野市内や湯田中温泉がある山ノ内町などに宿泊する参加者も多い。今年の大会も一月の段階で応募定員七千人に達し締め切られている。

【五島列島タヤけマラソン】

長崎県の五島列島で最大の島、福江島で八月末に行われる五島列島タヤけマラソンは、マラソン大会では珍しく土曜の夕方に行われる。真夏の暑さを避ける意味合いもあるが、夕焼けを背に美しいシーサイドコースの風景を楽しめるのも魅力の一つとなっている。コース上では住民総出の温かい応援があり、給水所にはスイカが用意され、ランナーのオアシスとなっている。そして、ゴール後には、地元福江牛のバーベキューも無料で味わえる。この大会には日本全国からフェリーや飛行

機などで約二千人が集まる。大会当日は島の宿泊施設はどこも満室で、テントを張って野営する参加者も存在するほどの人気の大会である。

◆◆◆ 広がるマラソン大会の選択肢

ランナー初心者には、フルマラソン完走が第一目標となるが、フルマラソン完走して、中級者のレベルに到達したランナーは、次のステップとしてフルマラソン以外の別の領域に参加する傾向がある。具体的には、フルマラソンよりも長い距離を走る「ウルトラマラソン」、水泳、自転車、ランの三種目で競う「トライアスロン」、道路ではなく山道走る「トレイルランニング」の三つに大別される。

中でも「トレイルランニング」に関しては、「山ガール」という言葉も流行して、女性の参加人口の割合が増加している。また、「トレイルランニング」は、オフシーズンのスキー場のゲレンデや宿泊など各種施設を活用することができ、スキー・スノーボード人口が減少の一途をたどる中で、観光刺激策の一つとして有効である。九月に行われる

「信越五岳トレイルランニングレース」では、民間企業と共に、県の垣根を越えて、長野県と新潟県の関連自治体（長野市、信濃町、飯綱町、妙高市）が大会を支えている。

「ウルトラマラソン」、「トライアスロン」、「トレイルランニング」は、開催場所が都市部から離れた場所、自然豊かな場所で行われることが多く、交通規制をかける必要がないケースが多い。また大会自体、通常のマラソン大会以上に長時間を要するため、参加者は必然的にその土地に宿泊することが必要で、宿泊需要を見込めるイベントともいえる。

求められる継続的なマラソン運営体制の確保

マラソン人口が増加し、マラソン大会数が増える中で、



ぶどうの里ふれあいマラソン（岡山県井原市）ゴール後のぶどう食べ放題サービス

マラソン大会の運営側にとっても、誰をターゲットに、どんなテーマで、どんな特色があるかを明確にした大会づくりが

重要となってくる。そのためには、ランナーの様々なニーズを把握して、どう地域の資源（地形、自然、気候、産業、交通、人口規模等）を生かすかが必要となってくる。マラソン大会の実施は、地域に経済効果をもたらすが、決して即効性のあるものではなく、継続的に実施することで、初めて大きな効果をもたらすものであると考える。

しかしマラソン大会を継続的に運営することは容易ではない。マラソン参加者が急増する中で、財政難、人手不足、市町村合併に伴う業務の効率化などによって、既存の大会を中止するところも少なくない。南あわじ市で行われていた淡路島うずしおマラソンは、明石海峡大橋開通に伴って日帰り参加者が増えたことで、地元への経済効果が薄れ、今年二月、三十回の歴史に幕を閉じている。

また、屋外でのイベントである以上、中止リスクもある。一昨年流行した新型インフルエンザでは、その感染拡大を考慮して小豆島での大会などが中止となった。また、昨年は口蹄疫の影響で、酪農地帯がコースの一部となっている阿蘇、中標津での大会が中止となった。さらに、今年、東日本大震災の影響で全国で中止が相次いだ。中止リスクを乗り越えるためには、マラソン大会を継続して

図表：東京マラソン以降に新設されたフルマラソン大会

大会名	開催地	開始年月	直近のフルマラソン
湘南国際マラソン	神奈川県大磯町等	2007年3月	約18,000人
湯のまち飯坂・ふくしまマラソン	福島県福島市	2007年10月	約600人
とくしまマラソン	徳島県徳島市	2008年4月	約7,000人
下関海響マラソン	山口県下関市	2008年11月	約8,000人
海部川風流マラソン	徳島県海陽町	2009年2月	約1,500人
能登和倉万葉の里マラソン	石川県七尾市	2009年3月	約3,500人
宿毛花へんろマラソン	高知県宿毛市	2009年3月	約1,000人
四万十川桜マラソン	高知県四万十町	2009年4月	約1,000人
しまだ大井川フルマラソン	静岡県島田市	2009年11月	約6,000人
いわきサンシャインマラソン	福島県いわき市	2010年2月	約4,000人
佐渡トキマラソン	新潟県佐渡市	2010年4月	約1,000人
エコアイランド宮古島マラソン	沖縄県宮古島市	2010年10月	約700人
奈良マラソン	奈良県奈良市等	2010年12月	約10,000人
大阪マラソン	大阪府大阪市	2011年10月	約30,000人（予定）
神戸マラソン	兵庫県神戸市	2011年11月	約20,000人（予定）
京都マラソン	京都府京都市	2012年3月	約15,000人（予定）
ナゴヤウィメンズマラソン（仮称）	愛知県名古屋市中区	2012年3月	約10,000人（予定） （女性限定）
ちばアクアラインマラソン（仮称）	千葉県木更津市等	2012年10月	約15,000人（予定）

※小規模であるが2009年から福島県で会津東山温泉新緑マラソンが開催、また大分県でくさきとみくじマラソンが2009年からフルマラソンの部が創設されている。

開催することができ組織体制の整備が重要である。限られた地方財政の予算の中では、地域住民の参加が不可欠となってくる。地域が一丸となって率先してボランティア参加や沿道での声援を行って大会を支えることが大切である。そのためには地元住民も楽しいと感じる大会でないと長続きはしない。地元の人が楽しんで、参加者に対して心温まるおもてなしをすることで、観光客を増やし、地域のブランドも確立し、継続的な経済効果も期待でき、地域の活性化にも繋がっていくと言えるであろう。

震災が影響し、

マラソン大会中止相次ぐ

編集部

甚大な被害をもたらした東日本大震災の影響により、全国各地で市民マラソンを含むマラソン大会の中止、延期が相次いだ。被害の深刻さの考慮や、大会運営の困難さが主な理由で、中止となった大会の中には、主催者側が大会用品を支援物資として被災地に送るケースや、参加料を義援金として被災地に送るケースもあった。

大会用品等を被災地へ

三月十一日に地震が発生した翌日、日本陸連は、断続的な余震や交通機関の混乱が続くことを考慮し、同十三日に名古屋市内で開催予定だった「第三十二回名古屋国際女子マラソン」の中止を決めた。

その後、大会事務局は、愛知県東海市を通じ、大会で使用予定だった飲料、タオル、毛布などを同市と姉妹都市関係にある岩手県釜石市に送った。

茨城県内では、四月十七日開催予定だった「第

二十一回かすみがうらマラソン兼国際盲人マラソンかすみがうら大会」が中止となった。

同大会には、県内外から二万人を超える市民ランナーが集まる。また、健常者と視覚障害者の隔たりをなくし、誰もがスポーツを楽しめる大会として国内外で大きな反響を得ている。

会場となる土浦、かすみがうら両市とも今回の大地震で大きな被害を受けた。大会事務局は「大会の開催に向け、懸命に努力を重ねたが、会場およびコースの損壊や協力団体の支援など様々な問題に直面し、現状では、安全に大会を開催することが困難」として、やむなく中止を決めた。

また、多くの参加申込者から、「参加料の一部を被災地に送ってほしい」という要望が実行委員会に届けられたため、必要経費を除いた参加料を義援金として被災地に送ることにした。

今回の大地震は、本号特集記事で掲載した長野マラソン、佐渡トキマラソン大会にも影響した。

長野マラソン大会組織委員会では三月二十二日、四月十七日に開催予定だった第十三回大会の中止

を決定した。

組織委は、東日本大震災、長野県北部地震、福島原発の事故の被害の深刻さ、被災者の気持ちを考慮。さらに、被災地への救援活動には、長野市をはじめ長野県内から多くの人々が出動しており、大会運営に欠かせない警備体制、医療救護体制、ボランティアの支援が十分に確保できない恐れがあり、仮に開催しても、安全・スムーズな大会運営ができないと判断した。

また、参加料相当分を義援金として、タオル、スタッフウェア、スタッフキャップを支援物資としてそれぞれ被災地に送る予定だ。

新潟県佐渡市で三月二十七日に開催予定だった「佐渡トキマラソン大会二〇一一」の中止は同十六日に発表。

大会実行委員会は、大地震による断続的な余震や交通機関の混乱が続くことによる運営面への影響などを総合的に判断したという。



かなぎ丸ごといい感じ

～年中どこかで何かが面白い～

青森県五所川原市は、津軽半島のほぼ中央に位置し、「三津七湊」の一つとして、その繁栄ぶりを現在に伝える中世安藤氏の十三湊遺跡群や、青森でも有数の夏祭り「五所川原立佞武多」などの歴史文化資源を有す。また、世界的にも珍しい果肉・花・若葉・枝まで赤い「赤いりんご」の生産や、十三湖のシジミ漁など農林水産業を基幹産業とする豊かな自然に恵まれた田園都市である。

今回訪れた同市金木地区は、作家

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成17年11月
設立・運営主体＝
特定非営利活動法人、自主的組織
(コミュニティ組織)
代表者＝代表理事 今 誠康
会員数＝19人
＜連絡先＞
〒037-0202
青森県五所川原市金木町朝日山
317-1
TEL 0173-54-2828
ホームページ
http://www.kanagi-gc.net/

太宰治の生誕の地、津軽三味線発祥の地として知られ、かつては津軽最大規模のヒバの集積地として栄えた。金木地区の活性化に取り組みNPO法人かなぎ元気倶楽部を訪ね、専務理事を務める伊藤一弘氏取材した。

誇れる郷土は自分たちで守る

平成十三年に金木町商工会事務局長として故郷の旧金木町に戻った伊藤氏は、活気がなくなっていく地域の状況を寂しく思っていた。また、旧金木町では、明治後期から、商工会が地域振興のリーダー役を果たしていたが、商工業の衰退、会員の高齢化などにより商工会活動にも限界がきていた。

こうした中、平成十七年三月に当時の五所川原市、金木町、市浦村が合併し、現在の五所川原市が誕生。



太宰治記念館「斜陽館」

伊藤氏は、行政の財政状況や飛地の合併であるため行政による地域づくりは一体的にできないという懸念などから、自分たちのまちが取り残されるのではないかという不安を抱き、誇れる郷土を自分たちの手で守るため、行政や商工会に依存しない組織の設立を決意した。そして、商工会で活躍する若者や地域で活動している仲間などを集め、同年十一月にNPO法人かなぎ元気倶楽部（以下、倶楽部）を設立した。

自立型への転換

倶楽部設立間もない平成十七年十二月、金木地区にある太宰治の生家を活用した太宰治記念館「斜陽館」と、「津軽三味線会館」の指定管理者公募が行われるのを知り応募し、同十八年度より運営を任された。伊藤氏は受託について、「団体として

の活動実績はなかったものの、商工会関係者が理事を務めているという信頼性、地域の伝統・文化を活用した観光振興事業や地域経済活性化を図るための各種事業を行うことにより社会全体の利益の増進に寄与するという設立目的、収益を地域に還元するNPO法人ならではの特性などが評価されたのではないかと思う」と語った。

この二館の運営については、行政からの委託料はなく、入館料の一部（収益の七割は市に納入）で行わなければならず、倶楽部では民間の経営手法への転換を図った。全国の旅行者にPRを行い密接な連携をとったり、受け入れサービスの充実のため施設の常設ガイドの徹底などを行った結果、年間十万人という安定した観光客を金木地区に呼び込み、地域にビジネスチャンスを提供している。平成二十一年は太宰治生誕百年という節目の年であったため、斜陽館の入場者数は前年度より七〇％増の約十七万人に達した。

倶楽部では、津軽鉄道芦野公園旧駅舎を活用した喫茶店「駅舎」や太宰治ゆかりの地である築百四十年の古民家「旧傍島家」を活用した「かなぎ元気村「かだるべえ」」の運営などにより地域雇用の拡大にも貢献



かなぎ元気倶楽部のみなさん

かなぎ元気とミュージアム

訪れる人々に金木での滞在を楽しんでもらう工夫も行っている。町内

している。

このような地域貢献を果たす一方、地域の人々には「儲けているのは倶楽部だけ」という意識があった。そこで、倶楽部では、「金木」らしいもので商売ができないか自分たちで考えてもらえるよう、率先して地場産品を活用した商品やオリジナルグッズの開発・販売を行っている。また、毎月、「NPO法人かなぎ元気倶楽部新聞」を作成して地区内に配布し、活動の周知などに努めている。こうした活動が地域の人々にも刺激を与え、転作大豆を活用した焼酎などオリジナル商品を開発する人々もあらわれるようになった。

六つの通りに名前をつけて、その名にふさわしい物語の読み歩き看板を設置。そのうち太宰治疎開の家「新座敷」のある金木駅へと向かうゆるい坂には「メロス坂通り」と名付け、「走れメロス」の読み歩き看板を十

五カ所に設けた。そのほか、地元銘菓を味わいながらガイドと巡る「太宰治ゆかりの地かなぎ文学散歩」、プロの演奏者から習う「津軽三味線体験」、ヒバ細工体験等を行う「ふれあい田舎体験」などの体験型観光も行っている。

また、倶楽部は青森県、五所川原市、地域住民などと一体となり、太宰治生誕百年を機に平成二十二年に生まれた官民共同プロジェクト「太宰ミュージアム」にも取り組んでいる。これは「年中どこかで何かが面白い」をコンセプトに、金木地区を中心とする奥津軽全体をフィールドミュージアムとしてまち歩きや郷土の文化・食などを組み合わせた多彩な体験を楽しんでもらう催しである。この「太宰ミュージアム」を地域ブランドにして金木地区のあらゆる魅力を国内外に発信し、地域経済の活性化を図り、安定した雇用、安心できる住環境につなげたいと考えている。

地域の未来世代とともに：

地域づくりは自分たちだけで完結するものではなく、次の世代につなげていくものであるとの思いから、文学散歩のガイド養成や元気村での「かなぎ里山大学校」への参加など中学生や高校生を巻き込んだ事業も展開している。若い世代に地域づくりの大切さに気付いてもらい、地域に残ってもらいたいと考えている。「かなぎを元気に！プロジェクト」では「新商品開発チーム」と「新観光ルート開発チーム」のそれぞれに高校生から七十代までの世代を超えた人々が参加し、世代間交流を図ることや、次世代に地域の歴史や伝統等を伝えることにもつながった。こうした活動が浸透し、学校でも地域とかわる取り組みが行われるようになり、出前講座などにも声がかかるようになった。金木の名所を巡るスタンプラリーや里山大学校には、学年単位で参加するようにもなっている。

今後の展望について

伊藤氏は今後の展望について、次のように語った。

「倶楽部では、自分たちの地域の

魅力に気付いてもらいたいとの思いから地域住民を対象にしたイベントも大切にしており、地元催事のない時期には「真冬のフリーマーケット」や「雪とふれあいミニフェスティバル」などを開催している。平成二十三年度からは六つの通りでそれぞれ地域の人々を中心となった月替わりイベントやリヤカー市の開催も考えており、地域を巻き込んで地域活性化への意識を高め、地域全体を元気にしたいと思っている。また、金木地区には宿泊施設がないため、地域住民と連携して農家民泊などにも取り組みたいと考えている。そして、常に自由な発想を出し合い、活動できる団体でありたいと思っている。」

世代を超えて愛される地域づくりへ

このまちの象徴ともいえる「太宰治」や「津軽三味線」を活かしながら、地域の伝統文化・芸術を未来につなげようと新たなことに積極的に取り組む姿は、まちの「元気」につながっていると感じた。この「元気」が地域全体に波及し、世代を超えて愛される地域づくりが行われていくことが期待される。

編集委員 ● 水谷麻美

(注) ヒノキの一種で青森県の特産銘木

里山の保全活動を通じた多彩な活動

自然を大切に「思い」を次代に

広島県三原市は、中国・四国地方のほぼ中心、広島県の中央東部に位置し、人口は約十万六千人で、面積は四百七十一平方キロメートルと広島県の五・六%を占めている。温暖、少雨な気候で、南部の瀬戸内海沿岸地域と北部の山地・丘陵地域が織りなす多様な自然を有する地域である。

こうした三原市で、里山（集落に接した山）の保全活動を通じて地域の人や子どもたちに自然と親しむための活動を提供するNPO法人フォ

レストサポートクラブを訪ね、理事の堺谷氏と事務局長の新居氏を取材した。

スタートは天然記念物の保護増殖活動

フォレストサポートクラブの設立当初の目的は、三原市の国の天然記念物「沼田西のエヒメアヤメ自生南限地帯」の保全であった。

約十年前、天然記念物指定当時（昭和十年十二月）に比べ樹木の成長、竹の進出により地元の努力だけでは守りきれない状況であった。このため、エヒメアヤメ自生地の保護増殖活動に向けて広島県インストラクターである向井顕氏（前代表）が呼びかけ人となって、ボランティアの立場で貴重な財産であるエヒメアヤメを守る活動に協力したいと考えボランティアを募集。森林ボランティア団体フォレストサポートクラブと

して、平成十四年に会員数三十六人で発足した。

その翌年、広島県の認可を受けて法人となりNPO法人フォレストサポートクラブが誕生した。

自然と親しむ活動への転換

当初は、エヒメアヤメの保護増殖活動として、広島大学の中越信和先生の指導のもと、地元の保存会と一緒に竹の侵入を防いだり、下刈りや株数の調査を行ったりしていた。しかし、三年ほどして文部科学省からの支援が決まり、地元保存会のほかにも周辺に増設された工業団地の会社の社員達が社会貢献活動として保護活動に取り組み始めた。このため、ボランティアの必要がなくなり、同クラブは、エヒメアヤメの保護増殖活動から里山の保全活動を通じて地域の人や子どもたちに自然と親しん

でもらう活動へと転換を図った。

活動の拠点は荒れ果てた学校林

フォレストサポートクラブの活動を展開するにあたり拠点となる場所が必要であったため、メンバーたちは候補となる場所を探していた。その時、市内から車で約十分の山間に入った所に約二十年前に学校林として整備された場所があるのを発見し、この場所の使用許可を得るため市の教育委員会に願い出たところ、了承を得た。しかし、長年活用されていなかったことから、木や草が伸び荒れ果てた状況であったため、メンバーたちは、不要な木や草を切り払い、活動が展開でき、子どもたちが走り回っても怪我をしない程度まで整備した。そして、新たに「みんなの森」と命名し荒れ果てた学校林を見事に復活させた。

四季折々の自然を満喫できる活動の展開

新たに整備された「みんなの森」を拠点とし、毎年、里山小学校（子ども自然塾）を開催している。整備時の廃材を利用したクラフト教室にはじまり、植林体験、自然観察会、探鳥会、竹炭作り、リース作り、門

★ 団体プロフィール ★

設立年＝平成14年5月

設立・運営主体＝

NPO法人フォレストサポートクラブ

代表者＝井手原 孝範

会員数＝45人

<連絡先>

〒723-0054

広島県三原市頼兼2丁目4番20号

電話090-7997-9457

HP: <http://www.f-s-club.net>

E-Mail: shinkyoy@y.email.ne.jp



整備された学校林



PTC活動の様子



NPO法人フォレストサポートクラブのみなさん

松作りなど年間を通して様々な活動を展開し、今では年二十二回も開催するまでに至っている。参加者は一般公募で募るほか、地域の子供会や企業関連の環境学習会、体験プログラムでの参加者など現在では延べ千人近い参加がある。このほかにも、毎年秋に開催される御調八幡宮の例祭にあわせ森のコンサートを開催したり、ヒノキの積み木を四千個購入、制作し、市内の幼稚園・保育園に貸し出す活動も積極的に実施している。

PTC活動への着目

年間を通して様々な活動を展開しているが、三年ほど前、もともと地域の子どもたちに自然と親しむ機会を提供したいと考え、市内の小学校に授業の一環として「みんなの森」を

活用することができないかとお願いして回った。しかし、教師が多忙であることと、子どもたちが怪我をした場合などの問題があり、活用する学校はほとんどなかった。そこで、メンバーたちは保護者が計画し責任を持って連れてくるのであれば教師の負担も軽くなると考え、PTC活動（保護者と先生と子どもが親睦を深めるための活動）に着目した。現在ではメンバーの努力の結果、二つの小学校が賛同し各学年別に年六回、保護者と子ども、そして担任教師が参加し、主にクラフト教室を中心に活動を展開している。基本的には「みんなの森」で活動することになったが、悪天候などの場合はメンバーが小学校まで赴く出張講座も実施している。

子どもたちの多くは普段から里山で遊ぶという習慣がなく、この活動に参加することを非常に楽しみにしているようで、活動終了後には毎回必ず感想文を書いて送ってくれるという。PTC活動が広がるにつれて、小、中学校での図工授業（工作）で、工作の教材を全員一律の定番（杉の製材）から表情豊かな自然木に変えて、生徒の個性に合わせたクラフト作品を作りたいという要請も増えつつあるようだ。

活動展開の苦勞

活動を展開していくうえで一番の苦勞は、総面積六ヘクタールもある「みんなの森」の維持管理だという。その作業は非常に重労働であるのに対して、メンバーの三分の二はこのような作業が苦手です顔をを出すことにはないらしい。しかし、絶対に強制して出席させることはしないという。この理由について堺谷氏は「メンバーたちはボランティアで参加しています。強制してしまうとこのような団体は続くことはない。メンバーの中でも興味を持っていることは人それぞれ違うので、自分の好きな時に参加

するというのが一番重要なことなのです」と話す。このような考えが団体を継続させ、様々な活動への展開につながる要因なのではないかと感じた。

地域に広がる「自然を大切にしたい」

設立から九年目を迎え、地域には自然を大切にする思いが徐々に広がり始めている。市内のある学校は、新設する図書空間の備品をなるべく既製品から自然のぬくもりが伝わる素材を活用した手作り品にしたいとの校長の強い要望に、クラブとしての思いも重なり全面的に協力した。また、学校の敷地内の樹齢百年程の桜の木をどうしても伐採しなければいけなくなった時も、伐採した木を廃棄するのではなくその桜の木を利用して、児童たちにクラフト教室を開催してほしいという話になった。このように活動転換時の目的であった「自然と親しんでもらう活動」を通じて、「自然を大切にしたい」が地域の子どもたち、そして教育現場に定着しつつある。

こうした活動と「思い」が大きく広がっていくことを今後も期待したい。

「地域資源を見直し需要創造」

～流通ジャーナリストの金子哲雄氏が基調講演～

平成二十二年度の地域再生実践フォーラムが三月八日、東京丸の内

の東京国際フォーラムで開かれた。年間五回、各地で開催している「地域再生実践塾」のまとめとなるもので、今回が六回目。

地域再生や地域おこしの実践者から、成功への実践的エッセンスなどが披露され、約四百五十人の参加者が聞き入った。

地域資源の棚卸し

フォーラムの基調講演では、流通ジャーナリスト／ブライスマナリストの金子哲雄氏が「お金をかけずに地域を活性化するためのヒント!!」と題して基調講演した。

金子氏は、中小企業へのコンサルタントや地域への取材等の経験をもとに、地域を元気にするためのヒントを提



基調講演する金子哲雄氏

示した。地域が元気になるためには、まず地域の企業が収益性を高めなければ

ならないとしたうえで、商品（またはサービス）には、①集客商品（お客を呼ぶことはできるが、儲からない）と②収益商品（お客を呼べないが、儲かる）があるとした。補助金に頼らず、地域のイベントを継続するためには、集客と収益をバランスよく（集客と収益の3...2の法則）組み立てることが重要であるとした。また、地域のあらゆる資源を棚卸しする形で見直しを行い、域外の人たちにお金を使ってもらうきっかけづくり、いわゆる「需要創造」していくことが大切だと語った。講演会場の参加者は、金子氏の軽快な講演に、熱心に耳を傾けていた。

「社会起業家」「食」をテーマに議論

基調講演後、二つの分科会（セミナー、セミナー2）でパネルディスカッションが行われた。

セミナーは「社会起業家が地方を元気にする」がテーマ。コーディネーターに日本経済新聞社編集委員

で明治学院大学教授の原田勝広氏を迎え、パネリストとして日本ボリグル（株）代表取締役会長の小田兼利氏、アマタホールディングス（株）代表取締役会長兼社長の熊野英介氏、葡萄園スギヤマ経営者の杉山経

昌氏が参加した。三氏はそれぞれの実践事例を挙げながら、志をビジネスに変える発想や、活動に対する思いなどを語り、「Think Globally, Act Locally」の重要性を説いた。

最後に原田氏は「地域には多くの資源があり、これらを活用し、社会的課題の解決に繋げていくことで地域が変わり、そして日本が変わる」と締めくくった。

セミナー2は「食のまちづくり」市民のニーズはスローフードにあり「食」がテーマ。コーディネーターに地域再生プランナー／民間都市開発推進機構都市研究センター研究員の久繁哲之介氏を迎え、パネリストとして観光カリスマ／からり直売所出荷者協議会名誉会長の野田文子氏、レストラン・プロデューサー／（有）河崎妙子事務所代表取締役社長の河崎妙子氏、B級ご当地グルメでまちおこし団体連絡協議会（通称・愛Bリーグ）副会長の豆津橋渡氏が参加した。

三氏は地域資源である食が地域活性化の触媒になるとの観点から、それぞれの実践事例を挙げながら、住民が食の潜在能力を認識し、それに自信を持ち、地域の独自性を加えることの重要性などを語った。



三豊市長 ● 横山 忠始

「世界の地方都市・三豊」 として

東日本大震災で大きな被害を受けた被災者の皆さまにお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになりました皆様のご冥福をお祈り申し上げます。今後も私たちは東日本と困難を共有して、復興支援に積極的に取り組んで参りたいと考えております。

時は幕末、慶長三年四月二十三日の夜十一時ごろ、幕末の英雄、坂本龍馬の乗る海援隊の「いろは丸」が大阪に向けて航行中、紀州藩の「明光丸」と衝突するという、わが国初の蒸気船同士の衝突事故が発生しました。世に言う「いろは丸沈没事件」。その現場となったのが瀬戸内海のほぼ中央に突き出た香川県三豊市詫間町の荘内半島箱崎の沖です。

造船技術・造船技術で名を馳せた塩飽水軍をはじめ、日本で最初の海員養成学校である「国立粟島海員学校」が設立されるなど、古くから本市と瀬戸内海とのつながりは深く、強いものがあります。この瀬戸内海は世界有数の景観を持つ、エーゲ海にも勝る一級の観光資源であると言われ続けていたものの、その利用策が見つかっていないというのが現状でした。瀬戸内海とのつながりをもう一度見つめ直し、瀬戸内海復興の手がかりと突破口を見つけるため、広島県福山市、岡山県瀬戸内市、愛媛県新居浜市、香川県高松市



と三豊市の五市の市長が一堂に会して『中四国・瀬戸内クルージングサミット』を開催しました。このサミットに参加した五市は四つの県にまたがっています。五つの都市がその県境をやぶってパイプをつなげないかという、地方の時代の先陣を切って行う、基礎自治体による全く新しい試みです。

「地域主権」「地方分権」と叫ばれて久しい今日でありますが、北海道から沖縄まで、すべてを同じ基準でコントロールする時代はすでに終焉を迎えていると感じます。それぞれの地域でそれぞれのリーダーが責任を持って地域づくりを行う、多種多様な都市が存在する国家をつくらなければならぬ時代、地方が中心になっていく時代はすでに始まっています。

一方、情報技術の進展、交通機関の発達により、世界は狭くなってきています。情報伝達の手軽さや移動時間といった物理的な面だけでなく、精神的、思考的な面など様々な物事においても絶対的に世界は狭くなってきています。世界基準はどんどん統一化の方向に向かっており、世界が基準を一本化しようという動きはそこかしこで起きています。こうした時代を生き抜く上で、我々は日本の地方都市であると同時に、世界の地方都市・三豊であるという意識改革を進めています。また、我々が住むアジアには世界の人口の約60%が住んでいます。したがって認識として、我々は世界の一員であり、特にアジアの一員であることは強く認識していきたいと考えています。アジアにはあらゆる可能性が潜んでいます。かつて塩飽の船方衆が咸臨丸で世界を駆け巡ったように、我々も瀬戸内海から世界へ、世界の地方都市・三豊として、そして多種多様な都市が存在する中においても、個性が輝く三豊市となれるよう邁進していきます。



三豊市長 ● 横山 忠始

「世界の地方都市・三豊」として

東日本大震災で大きな被害を受けた被災者の皆さまにお見舞い申し上げますとともに、お亡くなりになられました皆様のご冥福をお祈り申し上げます。今後も私たちは東日本と困難を共有して、復興支援に積極的に取り組んで参りたいと考えております。

時は幕末、慶長三年四月二十三日の夜十一時ごろ、幕末の英雄、坂本龍馬の乗る海援隊の「いろは丸」が大阪に向けて航行中、紀州藩の「明光丸」と衝突するという、わが国初の蒸気船同士の衝突事故が発生しました。世に言う「いろは丸沈没事件」。その現場となったのが瀬戸内海のほぼ中央に突き出た香川県三豊市詫間町の荘内半島箱崎の沖です。

操船技術・造船技術で名を馳せた塩飽水軍をはじめ、日本で最初の海員養成学校である「国立粟島海員学校」が設立されるなど、古くから本市と瀬戸内海とのつながりは深く、強いものがあります。この瀬戸内海は世界有数の景観を持つ、エーゲ海にも勝る一級の観光資源であると言われ続けているものの、その利用策が見つかっていないというのが現状でした。瀬戸内海とのつながりをもう一度見つめ直し、瀬戸内海復興の手がかりと突破口を見つけるため、広島県福山市、岡山県瀬戸内市、愛媛県新居浜市、香川県高松市

新居浜市、香川県高松市



と三豊市の五市の市長が一堂に会して『中四国・瀬戸内クルージングサミット』を開催しました。このサミットに参加した五市は四つの県にまたがっています。五つの都市がその県境をやぶってパイプをつなげないかという、地方の時代の先陣を切って行う、基礎自治体による全く新しい試みです。

「地域主権」「地方分権」と叫ばれて久しい今日であります。北海道から沖縄まで、すべてを同じ基準でコントロールする時代はすでに終焉を迎えていると感じます。それぞれの地域でそれぞれのリーダーが責任を持って地域づくりを行う、多種多様な都市が存在する国家をつくらなければならない時代、地方が中心になっていく時代はすでに始まっています。

一方、情報技術の進展、交通機関の発達により、世界は狭くなってきました。情報伝達の数や移動時間といった物理的な面だけでなく、精神的、思考的な面など様々な物事においても絶対的に世界は狭くなってきました。世界基準はどんどん統一化の方向に向かっており、世界が基準を一本化しようという動きはそこかしこで起きています。こうした時代を生き抜く上で、我々は日本の地方都市であると同時に、世界の地方都市・三豊であるという意識改革を進めています。また、我々が住むアジアには世界の人口の約六〇%が住んでいます。したがって認識として、我々は世界の一員であり、特にアジアの一員であることは強く認識していきたいと考えています。アジアにはあらゆる可能性が潜んでいます。

かつて塩飽の船方衆が咸臨丸で世界を駆け巡ったように、我々も瀬戸内海から世界へ、世界の地方都市・三豊として、そして多種多様な都市が存在する中においても、個性が輝く三豊市となるよう邁進していきます。

第15回ふるさとイベント大賞

財団法人地域活性化センターは、全国各地で開催される地域の活力を生み出す優良イベントを表彰する「第15回ふるさとイベント大賞」を決定し、3月8日（火）に東京国際フォーラムで表彰式を行った。全国に紹介することで、ふるさとイベントの開催のさらなる発展を応援するのが狙いだ。今回は全国から応募のあった183イベントのうち、都道府県から推薦をいただいた120のイベントを対象に、「第15回ふるさとイベント大賞選考委員会」（北山孝雄委員長）において厳正な審査を行い、大賞（総務大臣表彰）に青森県田舎館村の「田んぼアート（稲作体験ツアー）」に決定した。続いて優秀賞に富山県南砺市の「スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド2010」と愛媛県四国中央市の「全国高校書道パフォーマンス選手権大会」。奨励賞には山形県長井市の「ながい黒獅子まつり」、富山県高岡市の「金屋町楽市 in さまのこ」、島根県邑南町の「INAKAイルミ@おおなん」、愛媛県伊予市の「夕焼けプラットホームコンサート」をそれぞれ選んだ。さらに、選考委員特別賞として香川県の「瀬戸内国際芸術祭2010」を選んだ。

大賞（総務大臣表彰）



田んぼアート（稲作体験ツアー）

【自治体名】青森県 田舎館村（人口8440人）

【主催団体】田舎館村むらおこし推進協議会

【開催回数】第18回

【開催日】（田植え体験ツアー）平成22年5月30日（日）

（稲刈り体験ツアー）平成22年10月3日（日）

（田んぼアート観覧）平成22年5月31日（月）～10月2日（土）

【開催場所】田舎館村役場東側水田

【観客動員数】（田植）1200人

（稲刈）1000人

（観覧期間）14万人

【イベントの概要】

平成5年から一般参加者を募って開催している稲作体験ツアー。楽しみながら稲の生長が見られるように、約15,000㎡の水田に色・種類の異なる稲を使って巨大なアートを描く「田んぼアート」を行っている。

優秀賞



スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド2010

【自治体名】富山県 南砺市（人口5万5670人）
【主催団体】スキヤキ・ミーツ・ザ・ワールド実行委員会
【開催回数】第20回
【開催日】（事前会期）平成22年6月5日（土）～8月19日（木）
（本会期）平成22年8月20日（金）～8月22日（日）
【開催場所】南砺市福野文化創造センター ヘリオスほか市内一円
【観客動員数】1万人
【イベントの概要】

「音楽を通しての異文化交流」をテーマに、世界各地の音楽や文化を伝えるワールドミュージック・フェスティバル。地域に根ざした新たな音楽文化の創造を目指す「市民参加型フェスティバル」としてユニークな活動を展開している。

優秀賞



全国高校書道パフォーマンス選手権大会

【自治体名】愛媛県 四国中央市（人口9万2754人）
【主催団体】書道パフォーマンス甲子園実行委員会
【開催回数】第3回
【開催日】平成22年7月31日（土）
【開催場所】愛媛県四国中央市川之江体育館
【観客動員数】3000人
【イベントの概要】

紙製品出荷額日本一の紙のまち四国中央市で、平成20年から開催している書道パフォーマンスの全国大会である。選手12人以内、演技時間6分以内の規程の中、音楽に合わせ、それぞれの演出で縦4m・横6mの紙に揮毫（きごう）し、「書之美」「演技之美」を競う。「紙のまち」ならではの地元企業・市民の協力のもとに開催されている。

選考委員特別賞



瀬戸内国際芸術祭2010

【自治体名】香川県（人口101万2280人）
【主催団体】瀬戸内国際芸術祭実行委員会
【開催回数】第1回
【開催日】平成22年7月19日（月）～10月31日（日）
【開催場所】直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島と高松港周辺
【観客動員数】93万8246人
【イベントの概要】

瀬戸内国際芸術祭2010は、「海の復権」をテーマに、アートとともに瀬戸内海や島々の魅力を発信し、訪れる多くの人々の交流により島々に以前の活力を取り戻し、瀬戸内海が地球上のすべての地域の「希望の海」となることを目指している。

奨励賞



ながい黒獅子まつり

【自治体名】山形県 長井市（人口2万9616人）
【主催団体】ながい黒獅子まつり実行委員会
【開催回数】第21回
【開催日】平成22年5月22日（土）
【開催場所】長井市内目抜き通り・白つつじ公園
【観客動員数】7万7000人
【イベントの概要】

長井市内約50の地区では、五穀豊穡などを祈願し、春から秋にかけて黒獅子舞が行なわれている。その起源は千年前に遡り、現在に至るまで伝承されてきた。ながい黒獅子まつりは、各地区の獅子舞が一堂に会し、中心市街地を練り歩く勇壮な祭りである。

奨励賞



金屋町楽市 in さまのこ

【自治体名】富山県 高岡市（人口17万7326人）
【主催団体】金屋町楽市実行委員会
【開催回数】第3回
【開催日】平成22年9月18日（土）～9月19日（日）
【開催場所】金屋町石畳通り
【観客動員数】2万4000人
【イベントの概要】

江戸時代以来の町並みと銅器工芸の職を残す高岡市金屋町全域で行う生活空間内展示である。工芸と生活と産業が同居する「ゾーンミュージアム」というコンセプトのもとに、伝統産業活性化による文化拠点再整備を目指している。

奨励賞



INAKA イルミ@おおなん

【自治体名】島根県邑南町（人口1万2124人）
【主催団体】INAKA イルミ実行委員会
【開催回数】第1回
【開催日】平成22年12月3日（金）～12月5日（日）
【開催場所】島根県邑南郡邑南町宇都井
【観客動員数】1万人
【イベントの概要】

このイルミネーションは、この豊かな田園風景とJR 宇都井駅を舞台に、本町のLEDメーカの技術力を地域資源に活用した取り組みである。このイベントの立上げから実行まで、専門家の指導のもと地域住民一人ひとりが「邑南町の資源」について見つめ、光の活用をテーマに考え、話し合い、協力し、LED デバイスの一つひとつから手造りで手掛けた。

奨励賞



夕焼けプラットホームコンサート

【自治体名】愛媛県伊予市（人口3万9537人）
【主催団体】夕焼けプラットホームコンサート運営委員会
【開催回数】第25回
【開催日】平成22年9月4日（土）
【開催場所】JR 下灘駅
【観客動員数】1000人
【イベントの概要】

瀬戸内海に面する静かな無人駅が舞台の夕焼けプラットホームコンサート。JR 下灘駅に響くミュージシャンの歌声と刻々と変化する夕景に情緒が募る。「しずむ夕日が立ちどまる町・双海町」のオンリーワンのイベントである。

手前みそ
ですが…

兵庫県

宝塚市

147



■映画「阪急電車 片道15分の奇跡」の撮影をきっかけに市民ボランティアにより再現された、原作に登場する「生」のオブジェ

宝塚にはかつて宝塚映画製作所があり、日本映画の全盛期に小津安二郎、成瀬巳喜男、川島雄三監督らによる176本におよぶ映画史に残る作品が作られた。残念ながら同製作所は昭和53年に閉鎖されたが、このほど30数年ぶりに、宝塚市在住の作家・有川浩さんの原作による「阪急電車 片道15分の奇跡」（三宅喜重監督作品）のロケ撮影が市内で行われた。映画の撮影にはエキストラ6800人が登録しオールロケのシーンに出演、また、武庫川の河川敷に「生」の石積みアートオブジェを100人のボランティアにより再現するなど、大きな話題となった。

愛と夢をはぐくむ宝塚大劇場や手塚治虫記念館、「安産の観音様」中山寺や「かまどの神様」清荒神清澄寺などの観光スポットとともに、4月29日からの全国ロードショーにあわせて、映画ロケ地としての新しい宝塚の魅力発信に大きな期待が集まっている。



■映画「阪急電車 片道15分の奇跡」のロケ撮影風景



■宝塚市が制作した映画応援のポスター



■手塚治虫記念館



■宝塚大劇場



■中山寺



■清荒神清澄寺

調査研究報告書「『地域自治組織』の現状と課題 ～住民主体のまちづくり～」を発行しました。



財団法人地域活性化センターでは、毎年度、地域活性化に役立てるため、地域の課題となっているテーマについて調査研究を行っています。平成22年度は、「地域自治組織」をテーマに調査研究を実施しました。

地域自治組織とは、小学校区単位などで、公民館やコミュニティセンターを拠点に、地域住民の代表者やNPO等の地域内の諸団体の関係者で構成された住民自治組織であり、地域住民が地域課題に対する解決策を自ら企画立案し、実践している組織として称されています。

本調査研究では、全国の住民自治組織の実態について把握すると共に、住民自治組織のあり方について検討しています。

この報告書は、当センターのホームページ「地域づくり百科」(http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/7_consult/kenkyu/kenkyu.html)でも公開していますので、今後の住民自治組織の活動や住民主体のまちづくりの参考としてお役立てください。

過去の調査研究のテーマ

平成21年度 「『空き家バンク』を活用した移住・交流促進」

平成20年度 「地域の魅力を発信するご当地検定」

平成19年度 「市町村合併後の新しいまちづくり」

平成18年度 「景観による美しいまちづくり」

「地方自治法上の地域自治区を活用した取り組みについて」

第29回地域づくり団体全国研修交流会 熊本大会開催中止のお知らせ

今般発生した東北地方太平洋沖地震により被害を受けた被災地域の皆様に、衷心からお見舞いを申し上げますとともに、被災地域の1日も早い復興を祈念いたします。

平成23年5月13日（金）～15日（日）の日程で開催する予定でありました第29回地域づくり団体全国研修交流会熊本大会は、今回の大地震の甚大な被害状況を鑑み、開催中止を決定いたしました。

つきましては、参加申込みをいただきました皆様には、大変ご迷惑をおかけいたしまして、誠に申し訳ございませんが、何卒ご理解ご了承賜りますようお願い申し上げます。

地域づくり団体全国協議会

○お問い合わせ先

第29回地域づくり団体全国研修交流会（熊本大会）実行員会事務局

熊本県企画振興部地域振興課内

担当：古閑・山中

TEL：096-333-2135／FAX：096-381-9001

私たちが「地域づくり」誌を支えます～新編集委員が始動～

▼地域の人々の繋がりや取り組みなど地域の魅力を伝えていけるよう頑張ります！（平野） ▼地域づくりの参考となる情報をたくさんお届けできるよう頑張ります。（杉森）

▼地域づくりにかける熱い想いを、多くの方々に伝えられるよう頑張ります！（稲福）

▼全国各地のホットな地域づくり情報をお届けできるよう頑張ります！（前田） ▼皆様の地域づくり活動に役立つ情報を発信していきたいと思います。（水谷） ▼地域の素晴らしい活動を皆様に届けられるよう頑張ります！（奥原） ▼地域の活性化につ

ながる様々な情報を全国からお伝えします。（小野） ▼全国の地域づくりに役立つ情報をしっかり伝えていきます。（京野） ▼地域の熱い活動が全国に広がりますように。（唐澤） ▼地域づくりに頑張っている皆さまの取り組みを紹介していきます！（山口）



★日本橋プラザビルイベントスペース

4月

- 4月27日(水)～28日(木)
長野市の観光と物産展実行委員会(長野県)

5月

- 5月23日(月)
菊川市観光協会(静岡県)
- 5月26日(木)～27日(金)
日立市地域ブランド推進協議会(茨城県)
- 5月30日(月)
福島県県南地方振興局(福島県)



(写真)

- 1 2月17日(木)～18日(金)『うまさがあふれる 春一番!!』胎内市(新潟県)
- 2 3月7日(月)～11日(金)『ひらつか花アグリ1周年記念フェア～湘南ひらつかの春を感じてみませんか～』神奈川県、平塚市(神奈川県)
- 以上、有楽町ふるさと情報プラザ(3月31日閉鎖)
- 3 2月3日(木)～4日(金)真岡市(栃木県)
- 4 2月9日(水)～10日(木)日立市地域ブランド推進協議会(茨城県)
- 5 2月25日(金)香取市(千葉県)



【編集後記】

▼東日本大震災により亡くなられた多くの方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に謹んでお見舞い申し上げます。一日も早い復興をお祈りいたします。

▼今回の特集テーマは「マラソンによる地域活性化」です。東京マラソン開催以降、全国で市民マラソンブームが起きています。特集で取り上げた大会は、いずれも主催者が大会を盛り上げて地域の活性化を図ろうとさまざまな工夫を凝らし取り組まれている事例です。こうした大会関係者の奮闘ぶりが伝われば幸いです。

また、大震災の発生以降、各地でマラソン大会の中止が相次ぎました。中止を決めた大会の中には、主催者が参加料の一部を義援金として被災地へ送る方針を決めるなど、被災地支援に向けた動きを見せた大会もありました。

▼新編集委員がまちづくり団体の取材などで動き出しています(センター通信参照)。四月以降も、地域づくり、まちづくり関係の取材等で全国各地をうかがいますので、よろしく願いいたします。

× ×

東日本大震災の影響により、四月初めに発行予定だった四月号の発行が大幅に遅れ、誠に申し訳ございません。五月号につきましても、同月初めより多少遅れる見込みです。どうかご了承いただけるようお願いいたします。(編集部)

「5月号予告」

特集Ⅰ 震災を乗り越えて①(仮)
特集Ⅱ 買い物弱者を救うまちづくり(仮)

地域づくり4月号

2011年4月20日発行 編集・発行＝財団法人地域活性化センター

東京都中央区日本橋2-3-4 日本橋プラザビル13階 電話03-5202-6131(代) <http://www.chiiki-dukuri-hyakka.or.jp/> 印刷・製本／株式会社丸井工文社

法律で許可された場合以外に、本誌からの無断転載を禁止します

落丁・乱丁はお取り替えます。情報サービス課(03-5202-6135)まで、ご連絡下さい。

きつと。。。

自分を信じて、運を信じて、明日を信じて。

一歩踏み出せば、そこからなにかが開けてゆく。

さあ、チャレンジャー精神で。

夢みる心からはじめましょう。宝くじ。



当せんはしっかり調べて、しっかり換金。

- 宝くじの収益金はみなさまの身近な街づくりに役立てられています。
- 外国発行の宝くじを、日本国内において購入することは、法律で禁止されています。